

---

# 葉山高校の日常

s.s.t

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

葉山高校の日常

### 【Nコード】

N7926V

### 【作者名】

s.s.t

### 【あらすじ】

葉山高校は県内有数の進学校。物語の語り手はこの高校に勤める女教師・鷹田英理子。つまらなかった日常に起きた変化が彼女の口を開かせた。

非現実的な盛り上がりは何も見せる事なく終結する予定の物語。ジャンルは学園物。

「はじめに」のページを最初に読んで頂けると幸いです。

## はじめに

拙作、「葉山高校の日常」のページを開いてくださりありがとうございます。

ここでは拙作を読むに当たつての注意事項と言いますが、私が未熟なためにややこしくなってしまった作品の構成についてご説明いたします。

まず拙作には第一話と第二話が既に存在しますが、本編は第二話から開始となります。

細かい理由は活動報告で説明しておりますが、ここでは具体的な内容だけ述べておきます。

- ・第一話の一〇六人目：本編を書き始める前にメインキャラ達の話を一話一人形式で書きました。
- ・第一話の七人目：現在はまだ書いていませんが本編で登場したメイン以外のキャラ達について同じ様に書こうと思います。
- ・第二話：本編です。第一話を読む必要はありませんので、ぜひこちらからお読みください。

第一話はおまけ、第二話を本編として書いています。

第一話の内容は語り手役のキャラが本編から三年後に物語や登場人物達を思い返しているという感じです。

漫画で言う所の巻末にあるプロフィール紹介の様な物で、お恥ずかしながら面白さを保証できる物では有りません。あえて面白い所を挙げるなら、投稿した順に時系列で読んで頂けると私が右往左往しながらあたふたと書いていることが見て取れるという位です。

ですから第二話を読んでくださった方の中で「おまけを読んでもいい」という方だけでも読んで頂ければ幸いです。

私にとっては初めて本格的に書く小説となりますので、お見苦しい点が多々あることと存じますがぜひともお付き合い頂きたいと願います。

## はじめに（後書き）

タイトルにある「第して」は本来「題して」が正しい漢字ですが、「第ゝ話」という形にしたかったので当て字として使ってみました。

## 一人目 鷹田英理子は女教師（前書き）

第一話は毎回一人の人物を中心に物語が展開します。一人目は本作の語り手である女教師・鷹田英理子。

決してヒロインを張れるような年では……じゃなくてキャラではないので語り手に抜擢された彼女にどうぞ親しみを持ってあげてください。

## 一人目 鷹田英理子は女教師

「教えてやる！ 東大は簡単だ！！」

このページを開いてくれた諸君にはまずこの言葉をくれてやろう。そう、ドラマにもなった某有名漫画に登場するセリフだ。バカ高校の不良たちが変人教師どもに教わり見事東大合格者を出す、と。なんとも奇抜な教育。魅力的なキャラクター達。そして何よりも物語として面白い。

だがこれ、東大を簡単に合格する奴らは他にもいるんだよ。

何の面白味もない、小生意気な奴らが。

そもそもあの漫画に登場する生徒なんて所詮はフィクションだし相当苦労してるし結局東大落ちてる奴もいるし。

それに比べてあいつらときたら高校生の分際で人生分かった気になってるし、東大に手が届くと思ったら勉強して無理だと思ったら割り切ってランク下の大学受けるし。

夢も持たずとりあえず堅実に、それでそうそう悪い人生を送ることにはならないだろうと諦観している。

本当につまらない奴らだよ。問題の一つも起こさない。全く、楽もさせてくれるが退屈もさせてくれる……

自己紹介が遅れた。私は鷹田英理子<sup>たかだえりこ</sup>。某県に存在する県立葉山高校で教師をしている。

担当は世界史。そして、生活指導教員も兼任している。

教師歴はそれなりに長いが私自身はまだ若いと言っておこう。

……嘘ではない。仮に私が教師歴10年を超えるベテランだったとしても私が某子供先生よろしく海外で飛び級して10代から教師を始めたとすれば辻褄は合う。決して仮に私が教師歴11年だった

としても今年34歳という計算になってしまふような事実はない。

ちなみに私は独身だがまだ若いので問題ないのは今の説明で諸君も分かってくれるだろう。そもそも私は結婚なんて人生の墓場とも呼ばれる苦行に興味は無いからな。決して。

さて、学園物らしきタイトルに釣られてこのページを開いた諸君にはのっけから私の愚痴をぶちまけてやった訳だが、今から詳しく話してやろう。

私の勤める葉山高校は県内でも有数、というか偏差値で言えば堂々の第一位を誇るこれぞ進学校という感じの学校だ。特徴といえばそのくらい。

そしてその特徴故にこの学校にはつまらない人間しか集まらない。先ほど述べた通りこの学校の生徒達とはにかく面白くない。高校生という枠組みの中で見れば無味乾燥を極めた人種と言えるだろう。

だからこの高校では何も事件が起きない。漫画やアニメの世界で起こるような面白おかしいイベントはない。ライトノベルの登場人物になれるような強烈な属性を持った人間もない。

つまり諸君がこれから読もうとしている物語は、何の変哲もない現実にも存在する人間達による、ただの高校を舞台にした、等身大のまさに常通りの日常ということだ。

語り手はこの私、鷹田英理子が務めてやろう。可愛い女子高生さえ登場しないほのぼの的日常アニメも真っ青の平坦な物語だ。

まあ待て。ページを閉じるのはまだ待て。

さすがに私も悪ふざけが過ぎた。だから読む価値なしと判断して



ブラウザの戻るボタンやタブの閉じるボタンを押すのは待つてほしい。

これまで話したことは全てまぎれもない事実だが、私がこれから語るのはちよつとだけ面白かった話だ。

幸いなことに私が語る物語の始まりに、一人の馬鹿が我が高校に入学してきた。まあその馬鹿が入学してきたから私もこれを物語として語る気になったのだが。

その馬鹿はおよそこの高校に進学する生徒が現れることは有りえないとまで思われていた、何故か馬鹿しか集まらないある中学校から猛勉強して奇跡的に合格した輩だ。

諸君にも考えてみて欲しい。人生に妥協して安全確実に就職・出世を目指す無自覚エリート達と、目的は同じだが人生の一発逆転を目指して進学してきた馬鹿。

こいつらの価値観の違いが、イデオロギーの対立が、行動の摩擦が、どんな化学反応を起こすのだろうか。

私はあの馬鹿が入ってきた時思ったね。この馬鹿は葉山高校の生徒達に対する起爆剤になると。

私の期待通りに事が運んだかは追々話していくとしよう。

心配しなくても私は世界史の教師だ。歴史の語り手でもある私がこの物語の語り手として諸君を楽しませてあげると約束しよう。

まずは物語の中心となる生徒達について話さなくてはいけないな、あの馬鹿も含めて。

しかしこれで私もなかなか忙しい。後始末もあるし新生を迎える準備もある。ぶっちゃけ見たいアニメもあるし面倒臭いから今回はここまでにしよう。

私がまた口を開くのを待ってもらおうとして、諸君にはそれまで適当に時間を潰していてもらおう。

私のお勧めは「ドラ ン桜」や「ハンマー ッション」だな。名

作の学園物を読めばこの物語とのギャップも楽しめるだろう。というかもうそっただけ読んで私の話を聞くのはやめていいんじゃないか？　だんだん面倒になってきたし年のせいか記憶も曖昧だしな。

……あ、いや年じゃなくて私の担当教科のせいだな！　なにしろ世界中の歴史覚えてなきゃいけないし、若いとはいえ3年も前のことだからな！　少しぐらい記憶が薄れても仕方ない。

私は若いからな！　疑うというなら若さに裏付けられた記憶力による明確な記録を持って君達にこの物語を語ってやろう。次回を楽しみにしていたまえ！

## 二人目      平田慶次は思い悩む（前書き）

一話一人物形式の「葉山高校の日常」第一話、二人目は平田慶次君です。

この子に愛着を持てる人は中々いないと思いますが、それでも彼を  
よろしく願います。

## 二人目 平田慶次は思い悩む

……………この作品のタイトルだがな、最初は「馬鹿と女教師と普通の高校」とかいう感じの案もあったんだよ。実は。だけど完全にパクリだし、別に馬鹿も女教師も重要じゃないっていうかあくまでただの高校で起きた大して驚くところも無い話だからな、これ。

だからこの際つまらない話ですよって予め断るために「葉山高校の日常」なんて五秒で考えられそうな普通過ぎるタイトルを付けた訳なんだけど、案の定投稿した後新着小説を見てみたらちよつと下の方に似た様なタイトルの作品見つけちゃってさ……………どれだけ平凡なタイトルなんだよ！ って作者が自分にツツコミ入れてしまったなんて余談もあるんだ。

ちなみにパクる予定だった某ライトノベルみたいにファンタジー要素があるかどうかなんだが、基本この話にファンタジー要素は無い。強いて挙げるなら、私が持つ「好きなだけメタ発言できる能力」と「長年の教師経験から得た十代の少年少女の心理と私生活を見抜く能力」ぐらいだな。後者については生徒の心理描写とか私が見てないところとか語る上で不可欠だから作者が付与した能力なんだろう。

少年漫画大好きな私としては「能力」と聞けば心躍るものがあるが、まあ実際私が語り手なんだし私の視点が神の視点という認識で一つよろしくお願いするでしょう。

さて、前置きが長くなったな。ごきげんよう、諸君。鷹田英理子だ。

今回私が諸君に話してやるのは、平田慶次<sup>ひらたけいじ</sup>という男子生徒についてだ。

葉山高校二年生、十六歳のO型。

こいつの特徴は……特に無い。私から見れば、特徴の無い奴だ。というのも、こいつは典型的な葉山高校の生徒だと言えるからだ。葉山高の教師である私からすれば、うっかり存在を忘れたり別の生徒と間違えることが多い困った生徒である。

葉山高生はみんないくつかの面で共通した考えを有しているが、こいつはその傾向が特に顕著だ。ゆえに葉山高校、引いては我が校の生徒達について手っ取り早く諸君に知ってもらうには彼が適役という訳なのだ。

では、奴について語ってやろう。

……ふふふ、早速私の「能力」の出番だな。この魔眼を持って奴の一日の生活ぶりを赤裸々に披露してやろう。

日付は四月下旬、進級して少し落ち着いてきた頃だな。

まずは奴が電車に乗るところからだ。男の朝を描写するのはだるいし興味も無いので割愛する。

葉山高校は進学校だけに県内の至る地域、場合によっては他県から通学する生徒もいるので、電車を利用する生徒が多い。

電車が来たようだ。朝だから混んでいるな。

当然平田も乗り込むが、あいつが乗るのは並んでいる乗客達の最後だ。先に乗って満員電車の真ん中でぎゅうぎゅうにされるより片面だけでもドアに接していた方が良いという考えだな。

これは葉山高生の特徴の一つだが、合理的な考え方をする生徒が多い。

たかだか電車で乗る位置にさえどこに立てば楽なのか一々頭を働かせる。端っこが楽、というのは平田の主観だが。

損得を細かく計算して行動を決めるので、感情に身を任せて衝動

的な行為に走ることなどほとんど無いだろう。

平田は絶対にギャンブルをやらないタイプだな。リスクを背負うならそれに見合うメリットがないと動かないだろう。逆に、必要な行為でもリスクが高いならどこかで妥協してしまう癖もあるな。あいつに限らず葉山高生には良くある話だが。

電車の中では携帯プレーヤーで音楽を聞いている。中身はおそらく人気のJPOPだろう。我が校に限らずとりあえず流行に乗っておくのはどこの生徒も変わらないようだ。

おや、平田の目が一方方向に固定されているな。

奴の視線の先にいるのは、サラリーマンとOLだな。ふーむ、別に痴漢とかではないようだ。

これはあれだ、いわゆる人間観察だ。葉山高生というより平田特有の習慣だな。

ぶっちゃけ平田は寡黙というか一歩間違えれば根暗の無口男だから普段他人と喋る習慣は無い。まあ不細工なわけでもないしおどおどした雰囲気がないからそういう風に見られることは滅多にない。

無口の代わりと言っては何だが、人間観察を良くやっているから人の心の機微についてはよく分かっている。いざ口を開けば、案外自分優位に話を進めるのが得意なんじゃないだろうか。

とりあえず私が平田になったつもりで例のリーマンとOLの実況をしてやろう。

まず平田の立ち位置は、座席の壁にもたれかかっている。横目で二人を視界に納められる場所だ。

OLの方はスマートフォンをいじっているな。動画でも見ているんだろう。

サラリーマンの方は……OLのスマートフォンを覗きこんでいる。じっくりねっとりと画面を凝視している。

OLは全く気付いてないみたいだが、平田の視点から見るとリー

マンはむしろ露骨なぐらいだ。

このリーマン、自分ではさりげない振りをしているんだろうが、近くの人間が振り向くとさっと目を逸らしたりきよるきよるした後あたかも偶然目に入りましたよ、って感じでまたOLのスマホに目を戻すのだからもう一部始終見ているこっちからすれば滑稽そのものだ。

あ、駅に着いた時の乗り降りで位置が移動したな。もうスマホを覗きこめる距離じゃないぞ。

なんだか未練がましくOLの方をちらちら見ている。何回かOLの方を向いたけどおかしいと思われる前に諦めたみたいだ。十分不自然だったがな。

一体全体OLのスマホの画面には何が映し出されているんだか。私まで気になってきたぞ。

平田は手で口を押さえているな。表情は変わっていないが目が少し垂れている。あれは確実に手の下でにやけているはずだ。

次の駅の乗り降りでもたまた両者の距離が近くなった。リーマンの方はOLに近づいたことに気付いたようだ。さてどうするのか。

……おお！ 何の恥ずかしげも無く画面を覗きこんだ！ 奴には羞恥心がないのか？ それとも他人に見られているとは露ほども考えないのか？

平田が急速にドアの外へ顔を向けた！ かなり奇妙な行動だったがいきなり吹き出すよりはましだと判断したのだろう。口を押さえた手に反対の手で爪を立てている。これはつらい。私だったらリーマンと目を合わせてクスツと笑ってやるがな。まだ子供の平田には観察対象をどうこうするまでは考えられないようだ。

まあ茶番はここまでにしておこう。いくらなんでも朝の一場面で時間を取り過ぎた。

時間は飛んで朝の教室。

平田は無言で教室に入り、自分の席に着く。

始業時間までまだ十分ぐらいあるが、生徒はほとんど揃っている。この辺りの葉山高生の特徴としては、教室に入った時元氣良く「おはよう」なんて挨拶する習慣がないことと、始業十分前にはだいたいみんな登校してくることだ。

クラスメイトといえどそれほどフレンドリーにならないのが我が校の生徒達の嘆かわしい一面である。学校は大学進学のために勉強する場所。部活や友人関係は充実した生活のためにはある程度必要だが最優先ではないという認識がある。

さてさて、ホームルームも終わって一時間目が始まるわけだが、ここで葉山高校の授業内容と生徒の勉強面について話すでしょう。

長々説明するのは面倒なので簡潔にいこう。

まず授業。質も高いし量も多い。授業内容だけでも完璧に修めれば東大に合格できると言われている。実際は予習復習必須でかなりの重労働なのでついてこられる生徒は1割にも満たないが、ついていった範囲で自分の実力としたり塾や予備校で補ったりしてみんな思い思いに勉強に励んでいる。

そして生徒の勉強だが、一割はどん底の見込みなし、六割は無理をせず、二割強は必死に勉強し、残りの一割に満たないほんの一握りは、まごうことなき天才、もしくは秀才。

最後の一握りの生徒達だが、彼らは勉強で苦勞することを知らずそれこそ大学受験に限るならこの大学だって狙える奴らだ。放っておいても学校に功績を残してくれるから学校運営者からすればありがたい生徒達だろう。

ちなみに平田はというと、最も多い無理せず勉強をする派の生徒だ。嫌にならない範囲で、でも将来のために学歴は付いた方が良くからなるべく勉強はしておく。この学校に集まるのは大抵そういう奴らだ。例外的に何らかの理由で全く勉強する気を無くした奴らも



いるが。

平田の授業風景だが面白くも無いので飛ばそう。休み時間は誰も喋らないし（そもそも半数は次の時間の予習をしている）、授業で当てられても普通に答えるしな。

昼休みも似たようなものだ。一人で食べる生徒はそれなりにいるし、グループで食べる生徒と半々ぐらいだ。

放課後に行こう、と思ったが平田は帰宅部だった。

代わりに葉山高校の部活動について説明しよう。まず、帰宅部は意外かもしれないが少数派だ。

意識的にしろ無意識的にしろ、勉強だけやっていてもモチベーションが上がらないことを経験的に知っているから部活に参加する生徒も多い。

生徒によつては点数稼ぎと気分転換の一石二鳥を狙って委員会に入る者もいる。

葉山高校の生徒は八〇九割が部活に所属している。委員会は学期毎に決められた人数の委員を各クラスで決める。

しかし部活に参加する生徒が多いわりにはあまり良い成績を出す部がない。

元が進学校だから仕方ないが、熱心に練習する運動部であっても一人一人の地力が低いので大会で部活動に力を入れている高校と当たれば負ける。

文化部も練習や活動時間がたくさん必要な部は必然的に成績を出せない。

我が校で強い部といえば、囲碁部や将棋部、それからたまに文武両道の人間が入学してきて運動部で個人的に活躍するぐらいだ。

あとはクイズ研究会が熱心に活動しているのだが、部員が二人しかないのでもう一人入部させて高校生クイズに出ようと去年から躍起になって部員集めをしている。

部活動に関してはそんなところだ。平田の話に戻ろう。

このまま何も起こらないのもつまらないな。でも平田だし、仕方ないか。そもそも何も起こらない物語だしな、これ。

おや、運動場で珍しく騒動が起きているな。ぎゃーぎゃー騒いでいるのが一人いるが、あれは誰だったか……？

というかこの騒動については私も見ていたから知っているのだが、今はあくまで平田視点で話そう。

さて平田も騒ぎに気付いたようだ。どうするのだろうか？

「……」

あ、無言で立ち去ったぞ。ほとんど興味を示さなかったな。

触らぬ神に祟り無し、という訳ではなく関わっても自分に利点がないからだろうな、平田の場合。

人並みの親切心は持ち合わせているが、進んで関わろうとはしないのは他の葉山高生、だけでなく今時の子供にはありがちなことだろう。

まあ私もちよっと前まで十代だった訳だし気持ちは分かるぞ、うん。嘘じゃない。

だがこのままでは本当に何も起こらないな。

平田の、というよりそのまま葉山高校の紹介になってしまった。

このままでは何一つ面白くならないまま話が終わってしまう。何か手を打たねば……

じゃあこのまま平田が喋らないままなのも何だから、私が平田と対談した時の話をしてあげよう。

諸君はお忘れかもしれないが私は生活指導教員でもあるのだよ。覚えてくれていたかな？

だから役職柄生徒と話す機会も多い。今後紹介する生徒とも当然腹を割って話したことがある。

熱血教師、とは思ってくれるな。私だって必要がなければ生徒と深い話などしない。たまたまこの物語の期間中は話をする生徒が多かったというだけだ。まあその一因はやはりあの馬鹿にあるのだが。

では平田と私の話だが、会話をしたきっかけは五月に入って奴の遅刻回数が増えてきたことだった。

一年生の頃は問題も起こさないし特出した部分があるわけでもないので全く目立たない生徒だったが、ここに来て一週間に三日も四日も遅刻するようになったせいで私の目に留まった。

生活指導と言っても問題児がいないせいでほとんどやることがない私にとっては、遅刻常習者への注意は数少ない仕事のひとつだ。

遅刻が多い生徒のパターンは、我が校の場合二つ。

学校で勉強するより自分で勉強したい奴か、勉強自体嫌になった奴か。

前者は受験前の三年生なんかによく、「学校の授業は自分に合わない」なんて考えて登校しなくなる。まあこういう奴はたいてい勘違いしているだけだし、結局家にいても自制できなくて失敗するような精神的に弱い奴らばかりだ。

平田の場合は、後者。いやどちらかといえば後者というだけで、実際はもう少し深刻だったが。

四日連続で遅刻し、担任に注意されても次の週やはり何度も遅刻した平田は、学校の規定により担任の次は生活指導である私の注意を受けることとなった。

応接室に呼び出された平田は私に促されて対面に座るが、その様子に緊張はあっても不安や動揺は見られない。

「……平田。なぜ自分が呼び出されたか分かっているよな？」

平田は呼び出されることを想定して心構えを作っていたようなので、私は前置きを入れずに切り出した。

「はい、分かっています」

帰ってきた言葉は簡潔なもの。そもそも無口な奴なので仕方ないかもしれないが、答えは私の口から言うしかないようだ。

「分かっているなら細かい説教は無しにするが、平田は最近遅刻が多いな。何か理由はあるのか？」

「いえ、特別な理由はありません。すみませんでした。以後気を付けます」

平田は突き放したような応答しかない。

深く踏み入って来るなど、これは自分の問題だと心の中で叫んでいるようだった。

私からすればこういう生徒は初めてじゃない。平田が心の内を話してくれるまではつきりとはしないがいくつか原因の目星は付いている。

というわけで、経験からしてここで問い質すよりも次の機会を待った方がやりやすいと判断した。

「そうか、それならいい。今回の注意はここまでだ。もう帰ってもいいぞ」

「え……………あ、はい。失礼します」

そこで平田は最初戸惑った素振りを見せたが、すぐに落ち着いて返事をした。

まあ私には何を考えていたかお見通しだ。どうせすぐに帰してくれるとは思っていなかったから驚いて、その後私が面倒臭がりだから早く切り上げたがっているのだとでも判断したのだろう。

概ね当たりだが、一つ間違っている。確かに私は面倒事は避けて通りたいが、後回しにしても最終的に私が解決しないといけない問題に対してはちゃんと取り組む。

ただその過程で省ける面倒事はやっぱり避けようというだけだ。だから次回への布石として、部屋を出ようとドアノブに手をかけ

る平田に声を掛けた。

「一つ忠告しておくがな、平田」

ぴたっ、と動きを止めて平田が振り返る。

「……なんででしょうか」

「自分で気を付けるといった以上、明日からも遅刻が続くようならまた私と顔を合わせなきゃいけないぞ。この次は平田の遅刻問題に対して私自ら解決に当たる。自分でなんとかできるのはこれが最後のチャンスだから、心して置くように」

「……分かり、ました」

つつかえながら答える平田を見て、平田が私の言葉の裏を読んでくれたようだ確認した。口下手なあいつからすれば思考を巡らせながら返答しようとした結果なのだろう。

その上で分かったと言ったのだから言質を取ったも同然だ。次回を楽しみに待つとしよう。

さてさてそんな出来事があつた次の週、案の定平田は応接室で再び私の前に腰を下ろしていた。

「平田、なぜこの場にいるか確認するまでもないよな？」

「………はい」

相変わらず口を開くのが遅い奴だが、前回とは様子が違う。この間より精神的に参っていて、そのせいで私への態度も弱々しくなっている反面、それを取り繕いプライドを保とうとする感情も見えてくれる。

「結局平田は自分の力で遅刻を減らせなかった訳だが、まさかなんとなく遅刻するようになってしまいましたとは言わないよな？ 今日はお前が遅刻する理由も話してもらおう」

私は早速前回の布石を持ち出した。

「……わざわざ話す必要は、無いと思います。個人的な理由ですから」

「平田、これは問題解決のために必要なことだ。平田自身の力で解

決できない以上、私が指導しなければいけない。学校という組織に所属している以上、遅刻をせずに登校するのは平田の義務。その義務を果たせないなら、原因を話すのも平田の義務じゃないか？」

私がこういう言い方をするのは、平田に話しやすくするためだ。

平田が無口なのは、ただそういう性格だからというだけではなく自尊心が強いため心を閉ざしているのも理由にある。だからこいつのプライドを傷つけないように、教師に悩み事を相談するという自分を意識させないように、義務だと言い張る。

生徒の心を開かせる方法も色々だが、私が取るのはいつも一番効率的な手段だ。手っ取り早い方が面倒じゃないしな。

じっくり生徒と向き合って心の成長をさせるとかは、だるいし生活指導の域を脱しているだろう。それを生徒が望んでいるかどうかも分からないしな。

果たして平田がどう反応したかというと、私の思惑通りだった。

「たぶん長い話になるとありますが、いいでしょうか？」

恐る恐るだが、心を開こうとしている。私に拒否されると自分が傷つくから、慎重に確認もしてくる。

「どれだけ長くなってもいいから話すと良い。生活指導教員なんてそのためにいるようなものだ」

もちろん私は最初から奴の話を聞く気なので肯定した。

一度を腰を浮かせ、居住まいを正して平田が語り始める。

「なんというか、自分って部活にも入ってないし、特に趣味もないし、それでもこの学校に通っているんで勉強だけが取り柄みたいなものなんです……」

「ふむ、それで？」

威圧感を与えないように、簡潔な相槌を打つ。

「二年生に進級しても生活に変わり映えが無くて、高校にいる間はずっとこのままなのかなとは思っていたんです。でも」

平田は少しだけ口を閉じて、次の言葉を探っている。何と云えばいいのか、言ってしまった方がいいのか逡巡していたが、思いきった様

子で再び話し出した。

「唐突に高校から先の将来も想像しちゃって……大学に入ったからって、就職したからって、何が変わるんだろうかって。結局無意味な毎日を過ごし続けるんじゃないかって……思ってしまった。それで、自分が今まで何の理由もなく勉強していたことにも気付いて。理由もなく頑張るのが嫌になってしまった……」

ここまで聞いた平田の話は私の予想から大して外れていなかった。「理由がないって言うても全く無いわけじゃなくて、親のためとか、大学に行くためとか、そういう理由はあるんですけど。突き詰めると自分のためっていう理由が一つも無くて……」

周りから与えられた目標が無くて、動機が足りない。小さい頃からの刷り込みで出来た「勉強はするものだ」「学校は通うものだ」なんて思い込みだけを支えにして生きていたから、急に支えがなくなると一気に自分が崩壊するんだよな。

「そしたら……何言ってるんだって思うかもしれませんが、なんだかも自分の人生自体無意味なものに思えてしまった。これから先自分が変われるとも思えないんです」

極端な言い方をすれば自分というものが薄いから、今までの自分さえ否定されともう何も残っていない気になる。

「生きがいみたいなものが必要だと自分では感じているんですけど、興味を持てることも無くて。勉強も趣味も人付き合いも、自分にとってはその間に重要じゃ無くて……」

平田自身はもう袋小路だと考えている訳だ。これ以上解決策が見つからない。ここ数週間でそこまで思い悩んで、行き着いた先が出口の無い思考の迷路だ。

それはもう放って置いたら自殺してもおかしくないほどのシヨックだろう。でもなあ……

「どうしたら良いか分からなくて。遅刻の言い訳にはなりませんけど、何に対してもやる気がなくなっていました」

さっきから平田は私の反応を気にすることも忘れて心中を吐露し

続けている。でもなあ……

「平田」

「は、はい」

「お前の悩んでいることなんて誰でも大なり小なり考えているんだよ！ 自分が特別だとも思っているのか！ 『こんなに深く思い悩んでいる俺カッコイイ』とか『誰もこの可哀想な俺を理解してくれない』とか！ 心の底では思っているんじゃないのか？ そんなことでうじうじしてないでまずは行動。自分を変えられないとか思い込んでないでその前に限界まで足掻かないでどうするとうんだ！ やる気が起きないならさっさと死ね！ 死ぬのも無為に人生を送るのも嫌なら根性で努力して見せる！

……なんて言えたら苦労しないのだが、教師が生徒に対してそんな暴言を吐くとPTAとかモンペレとかがうるさいし、ああ……面倒臭い。

仕様が無いので私は今の心の叫びを胸の奥深くにしまって、目の前の面倒臭い生徒に優しい言葉を掛け始めた。

「平田、甘ったれるな」

「う、……はい、すみません」

……いや、優しい言葉だぞ？ 表面だけ取り繕ったような言葉よりもこう言う方が平田のことを思った真の優しさがあるというかな。嘘じゃないぞ？

平田が私に拒絶されたと思って心に傷を負っているようにも見えるが、ここから挽回するんだ。決してむかついたからちょっとひどい言葉を叩きつけたわけじゃない。

「勘違いしているかもしれないが、私は平田の悩みを否定している訳じゃない。平田の自分の悩みに対する態度が甘いように思えたからそう言ったただけだ」

「……はい」

別に平田は私に委縮して「はい」しか言えなくなっている訳では



ない。はずだ。

「その、なんだ……平田が抱えている悩みというのは、他の人間も少しは考えることだ。平田の場合はそれが少し深刻なんだな」

ほら、平田が望みそうな反応をしてフォローも入れてるだろ？

私は生徒のことをちゃんと考えているんだよ。

その証拠に平田も緊張がゆるんで私と会話しようとしてきたしな。

「鷹田先生もそういう悩みを持ったことがあるんですか？」

「……そうだな、私にもある」

ちなみに私は全学年の世界史を受け持っているので元々平田とも面識がある。

だからこいつも知らない教師よりは会話を試みようと思えたのだろうが、さっきまで一方的に喋っていたとはいえ、やっと会話する気になった話題が、これとは……

私としては生徒には話したくない話題なので、単純に平田への助言だけに止めた。

「その私の経験から言わせてもらうと、とにかく行動をするしかない。平田は自分を変えられる自信が無いようなことを言っていたが、そういうものではないんだ。気付いてないかもしれないが、平田の力で変わることではなくても、誰かの力で変われることもある。とにかく動いてみるしかないな。別に何かを強制する訳じゃないが、私の立場から平田に言うべきことは一つだ。遅刻をするな」

「そうですか……」

幸いにも平田は私の過去より私の言葉に興味を示したようで、自分の考えに没頭し始めた。

こいつは普段人と会話しない分、頭の中では人並みの倍以上のことを考えている。おそらく私の言いたいことも分かってくれるだろう。

まあ普通の人間が平田と同じ悩みを持っても日々の忙しさの中で悩んでいる暇も無くなるんだがな。考える人っていうのも良いことばかりじゃないってことだ。

その後も私は生活指導教員として平田に二、三の小言をくれてやったが平田は素直に頷いた。わざわざ語るまでも無い形式的なお説教だったが奴はさっきの助言に感心して私のことを認めたようで、私の言葉にはすんなり首肯した。

結果として、平田の遅刻は無くなった。

あの後とも思い悩むことが無くなった訳ではないようだが、それでも学校には来る。私が言った「とにかく行動」の第一歩は登校することだからだ。家に引き籠っていては人との出会いさえ無いしな。しかし今回私は平田に対して特別重要なことをした訳ではない。ドラマに出てくるような、真剣に生徒と対峙し幾度もぶつかり合い、事件の末に深く理解し合い、感動を伴って終結するようなことは無い。

そもそも平田の物語が本当に終わる訳ではないし、平田が私の言葉に感動したのでもない。ただ聞き入れるべき言葉の一つとして聞き入れ、自分で納得したただけだ。

私が奴の問題解決に一役買っていたとしても、解決したのは平田自身。

青春ドラマのような出来事があるわけがない。何も特別なことは起こらない。

生活指導の教師が遅刻常習者を一人矯正した。言葉にすればこんなものだ。

さて、これで平田慶次という生徒の話は一旦締めさせてもらおう。奴が活躍、と言っているのかは分からないが目立つのはもう少し先の話だ。そこには当然、あの馬鹿も関わって来る。

……その馬鹿の話はいつするのかって？ まあ諸君の気持ちは分

からないでもない。

今回みたいにつまらない男のどうでも良い悩みを聞かされた身としては、いつ面白くなるのか気にするのは無理もないだろう。

だが敢えて宣言しよう！ 馬鹿の登場は最後だと！

諸君には今回のように話の種にもならない、取るに足りないような人物達の話にもう少し付き合ってもらおう。

そもそも私が話そうとしている出来事に関わった人間は、葉山高校の生徒を含めて軽く千人を超える。私が知る限りでも、数十人分は話せるのだぞ？

だから私もどの人物について話そうか迷っているのだ。せめて十人ぐらいには止めたいが、どうしようか……

うん、とりあえず話したいだけ話すでしょう。

心配せずとも途中で面倒臭くなるはずだから、十人にも届かない内に「次はあの馬鹿の話をする」と宣言するはずだ。

馬鹿について話した次の回からは、それまで語った人物全員が関わるこの物語の核心とも言うべき出来事が起こる。ある意味そこが本番だ。

とはいえ期待してもらっても困る。「葉山高校の日常」はつまらない話だと冒頭でも念を押してあるし、あの馬鹿に対してライトノベルの主人公の様な魅力的な人物像を期待するのはやめてくれ。あくまで現実にいる平々凡々な一高校生だから、そのことは忘れないで欲しい。

それでは今回はここまでだ。

平田の話はあまりにも退屈だったから、次はもう少し活発な奴の話にしよう。楽しみにしていってくれたまえ。

## 二人目      平田慶次は思い悩む（後書き）

本格的に一人分の話を書いてみましたが、一回の更新に毎回二週間は掛かりそうです。十月に入ればもう少し更新ペースを速くできるかもしれません。

この作品にまだ読者は定着していませんが、これから続けて読もうと思ってください。た方に対してそれぐらいの更新頻度だとお知らせしておきます。

### 三人目      河津慎也は憧れる（前書き）

「葉山高校の日常」第一話、三人目の河津慎也君です。

一人目と二人目は人間性のベクトルが残念な方向に傾いています  
が、彼はどうなのでしょう？

私は彼が好感の持てる青年だと思うのですが、皆さんにもそう思  
って頂けると幸いです。

### 三人目 河津慎也は懂れる

突然だが、「井<sup>かわず</sup>(い)の中の一蛙」という言葉は諸君も聞いたことがあるだろう。そして知っている者は知っているだろうが、この言葉には「大海を知らず」という文句が続く。

井の中の蛙、大海を知らず。要は狭い世界に閉じこもって外にある広い世界を知らないという意味。後ろを省略して前の句だけで見識の狭い人間を指すことが多い。

私は葉山高校という場所も、一つの井戸だと思っている。

高校生になって少し気が大きくなって、しかも同年代の少年少女よりも優れた学力を有していることを保証されているためか、葉山高生は若干この「井戸の中の蛙」になりやすい傾向が見られる。本人達の間では広い視野を持っているつもりなので余計に性質<sup>たち</sup>が悪い。なるほど確かに、奴らは他の高校の生徒より賢いかもしれない。見聞を広めようと、世の中の動きにも目を向けているかもしれない。だがなあ、たかだか高校生が政治や経済の話をして、私から見れば、いや、大人から見ればそれはごっこ遊びだ。

所詮は高校生。ニユースで目にしない政治家の名前さえ知らないし、経済学の初歩を社会科目から断片的に学んでいるに過ぎない。奴らが仲間内だけで議論を交わしてもまさに井戸の中、大して実のある話ができる訳でもないのに偉くなった気分である。

……私の話を聞いてくれている諸君の中に何人の大人がいるかは知らないが、最近の子供達には腹が立たないか？

奴らは大人を舐めている！ 特に我が校の生徒達と来たらもう、何なんだあいつらは！

ちよつと将来の展望が見えたからって、ちよつと教師に匹敵する知識を手に入れたからって、もうその辺りの大人より優秀になった

つもりか！？

良い大学入って大企業に就職するから安月給のサラリーマンより偉いとか、高校の勉強が完璧になったくらいで教師と差が無くなったとか、阿呆か！ 人生経験からして違うんだよ！

本来年長者っていうのは、たった数年の違いでも確かな経験の差が、視野の違いが存在するんだ。

それだけで尊敬に値するんだよ。お前らは見せかけの実力主義とか親世代の過保護で外界の刺激から守られてるんだ。

教師なんてその良い例だよ！ P T Aのせいで生徒に強く当たれないせいで、奴らは私達を弱い人間だと誤認するんだ。

本当はな、大学卒業したての新米教師だってお前らに口論で負けたりしないんだぞ！ 教師としての立場と大人としての立場から引いてやってるんだ。

世の中の大人なんて本気になれば誰でもお前らをへこませる力ぐらにあるんだよ！ 青二才どもが！ ウエツ、げぼ、げぼ！

……………あー、あー、すまない。少々取り乱した。

どうも語り出しに愚痴を入れると口の回りが良くなるようで、ついついこぼしてしまう。

ごきげんよう、私だ。鷹田英理子だ。

若々しい美人でありながらベテラン教師の風格を漂わせていると評判の鷹田先生だ。

さっきの愚痴はあれだ、周りの先生がよくそういうことをぼやいているんだ。私はまだまだ若い年齢ながら、そういう生徒達と年の離れた先生方の心境も理解できるのでね。決して私自身が既に生徒達と隔絶された年齢差に到達してしまっているのではない。誤解しないでくれ。

うん、それでは今回の人物の紹介に移ろうか。話題転換で誤魔化している訳じゃないぞ？

今回は河津慎也かわつしんやという男の話だ。

葉山高校三年生、十七歳のA型。

こいつは前回の平田なんかとは全然違うぞ。プロフィールからして天と地ほどの差がある。

陸上部の部長で、エース。三年生四月の時点で、一・二年時に全国大会に出場した実績がある。

専門種目は競技人口が比較的多い100m走。もちろん他の短距離種目も部の誰より速い。

前回ちらつと話したが、葉山高校に時々入学してくる勉強も運動もできるタイプだ。個人種目、身体能力勝負という性質上強豪校に行く必要性も低いし、少々苦労したようだが葉山高校に合格するだけの学力もあった。

人当たりがよく、後輩には「頼りがいのある先輩」「すごい実績のある先輩」と評価され人望を集めている。

河津の同級生もだいたい同じ認識で、勉強ばかりの自分達には無い才能を持った人間として見られ、特に運動部の生徒からはある種の尊敬の念さえ抱かれている。

周りから見ればまさに文武両道、さらに人格者と三拍子揃った好人物だと言えるだろう。

そう、周りから見れば。

河津の様なタイプは葉山高校には一学年に数人いる程度で、ましてや全国大会に出られるほどの実力を備えている生徒は数年に一度入学するかしないかというほど希少だ。



故に、河津を深く理解できる奴も、その内面を想像できる様な奴もない。

まあ、私には奴の心の内が何となく分かる。

河津に限っては私の経験と同じタイプの生徒と深く関わったことは無い。しかし、私には分かる。少なくとも想像はできる。

それは何故かというと、私が大人だからだ。狭い世界に閉じこもらず普通に生きてきた大人ぐらいに視野が広ければ、こういう奴の考えそうなことは分かるものだ。

だから語ろう。

河津もまた、あの馬鹿と関わった一人だ。河津という人物を深く知ることは、今後の物語を面白くするかもしれないし、そう悪いことじゃない。

舞台は河津が三年生になった四月の下旬、葉山高校の運動場。サッカー部、野球部、陸上部が主に利用している。

河津があの馬鹿と初めて出会った場所、正確に言えばニアミスした場所だ。

ある日のこと、河津が授業後のHRを終え放課後の運動場に行くところで騒ぎが起きていた。

その騒ぎというのはもちろん、前回平田が華麗に素通りして見せたあの騒動なんだが。

運動場の割振りは校舎から見て野球部が右手前の正方形エリア、サッカー部がその隣で左手前の長方形エリアをそれぞれ使っている。陸上部は奥の細長い直線エリアを使ったり校外にランニングに行ったりする。スペース的にトラック競技の練習が不可能で、河津が

例外というだけで本来冷遇されている部なのだ。

騒ぎの中心はサッカー部のコート内で起きていた。

河津は自分の部ではないのでまずは様子見、ということで奥にいる陸上部員達の下に駆け寄った。

「何か問題が起きているみたいだけど、どうしたの？」

「あ、先輩。えっと、部外者の一年生がサッカー部の練習に混ぜてくれて言ってるらしいです」

部長に話しかけられた陸上部の後輩は助かったとでも言う様な表情で河津に事情を説明する。

「部外者？ サッカー部じゃないの？ どこか別の部の人？」

見ればサッカー部員に相對している男子生徒は普通の体操着で、シューズも運動靴、ソックスも脛当ても付けている様子は無い。本格的にサッカーをする格好では無かった。

「そういう訳でもないみたいで、帰宅部の一年が気まぐれで参加しようとしてるんですよ」

「ちょっと非常識な奴ですよ。真面目にやってるサッカー部員の迷惑を考えないっていうか」

「しかも都合の良いことに紅白戦にだけ出してもらおうとしてるんですよ」

「この学校にもああいう人はやっぱりいるんですね」

二年生の面々は騒いでいるのが一年生ということもあって原因の男子生徒を非難していた。

陸上部員達、特に二年生の否定的な意見を聞いていた河津だったが、問題を起こしている一年生を悪く思う気持ちはわき上がらなかった。

別に一緒にサッカーをやるぐらい良い気もするけど、と思ってしまふのだ。

さて、一体この河津と陸上部員達、いやむしろ陸上部だけでなく河津と葉山高生の間にあると言つべき考え方の違いはどこから生まれているのだろうか。諸君はどう考える？

私の答えはこうだ。

河津は全国大会にも出場するほどの陸上選手。中学の頃から県選抜の強化合宿に呼ばれることもしばしばあったと記録されている。

さらに陸上、特に河津の専門である100m走の様に技術より身体能力の比重が大きい種目だと、普段は別のスポーツをやっている選手も少なくない。

加えて河津は曲がりなりにも陸上部の部長を務めるほどには社交性がある。

つまりは、必然的に他校の生徒、様々な人種と関わる機会に恵まれていたと言える。これが河津が周りとは異なる考えを持つ理由だ。

河津の出会った人間の中には今サッカーコートで騒いでいる一年生などより余程驚くような話を聞かせてくれる者もよくいた。

例えば全国で仲良くなった地方の選手は、生徒数が少ないので普段は放課後暇な生徒達で色々なスポーツをやっていたという。

地方ブロックの大会では三つの部を掛け持ちして好き勝手に参加しているという選手もいた。

この近くにも、色んな部の助っ人を頼まれる選手がいて、最初は勝手に混ざっていたけどその内に上達したと話していた。

彼らに比べれば、その一年生の頼みごとは十分許容範囲だといふのが河津の嘘偽りない考えだった。

一応最低限の運動する服装はしているし、試合形式の練習だけ参加というのはむしろ他の練習だと邪魔になることを懸念した気遣いの表れだとも見れる。

もしかしたらすごくサッカーが上手いかもしれないし、うちのサッカー部は弱小なんだから部員を増やすチャンスと思えば良いじゃないか、なんて若干無責任なことも考えてしまう。

みんなに悪く言われているのが可哀想で同情さえしていた。

「先輩、うちの部はどうします？ このまま揉めていると運動場の空気が悪くなるし、サッカー部の人達も困っているみたいなので助けた方が良いんじゃないですか？」

少しの間思考に没頭し昔のこととも思い出していた河津は、その後輩の言葉で現実に取り戻された。

そうなのだ。さっきは避けて通ってきたが、今の今までまだあの一年生が引き下がっていないということは、サッカー部だけでは追いつけないかもしれない。

第三者が介入して一年生を宥めるなりサッカー部に妥協させるならしないと、平行線のままだ。

そして現在、少なくとも河津の周囲は陸上部の部長である彼に問題解決を期待する空気が生まれていた。

余計な一言を……と河津も思わずにいられないだろう。

後輩の言葉が無ければ「あっちは気にせず練習始めよう」とか切り出せただろうしな。

実を言うと河津はそんなにリーダーシップがある訳ではない。

今も運動場の向こうでこちらを一瞥して興味無さそうに顔を背けた、とある無口な生徒が下校していくのを見て「羨ましい……」と内心では思っている。

部長になったのも河津の実績から他の部員はあり得ないだろうという流れで決まっただけなのだ。

そして決定的に奴は自分に自信が無い。そのことについては後々語ろう。

そんな河津は、気丈にも騒ぎの中に身を投じた。

サッカー部の部長とは面識があったから、そっちの方へ。

サッカー部の部長は例の一年生を無茶な注文をしてくる迷惑な奴だと見なしていた。

しかし河津はどちらかと言えば一年生よりの心境で、だから素直に自分の気持ちに従った。

「参加させてあげても良いんじゃない？」と、自分の考えを伝える。一年生を諦めさせた方が早いしサッカー部の体面も守れるというのに、自分が正しいと思った方に味方する。

陸上に真剣だからこそ、他の物事に対しても同じ態度が取れるというのが、難儀ではあるが美点でもある河津の動かしようのない一面だった。

人を説得することなんて得意どころかむしろ不得意だというのに、河津は自分が必要されているからという理由で行動している。

そういう意味ではつくづく葉山高校では見られないタイプの生徒であり、私からして見どころのある奴なのだ。河津慎也という男は。

結局サッカー部の部長は思いの外すんなりと河津の意見を聞き入れた。

河津が思っている以上に河津は信頼されていて、その分発言力も強かったのだ。

ついでに「強いかもしれないよ」「部員増やすチャンスかも」という言葉も効果があった。

一年生がサッカー部員達に混ざるのを見届けて、河津は陸上部員達の下へ引き返した。

この一年生というのが言うまでもなくあの馬鹿なのだが、この時は会話も無くニアミスという形で終わることとなった。

問題をすばつと解決したと思われた河津は陸上部の面々に口々に

褒められ、それを笑顔で受け止めていた。

しかしこれで河津が自信を付けたかというところと全くそんなことは無い。

その訳は私これから語る河津慎也という男の内面を知れば諸君にもご納得頂けるだろう。

河津……こいつと私が話したのは馬鹿による一連の出来事が終わった後だったが、この運動場で騒ぎが起きた時のこいつは本当に哀れだった。

なんとというか河津は、運動部の間でちょっとしたカリスマにされているんだよな。

第三者の介入が必要ななら野球部でもいいじゃないか、と思うかもしれないが野球部も弱小だし、こういう時頼れるのは河津だというイメージが勝手に作られていた。

素の河津っていうのはただ陸上競技に全力で取り組んでいるだけで、その努力は称賛に値するものの本人の人となりは平凡なものだ。色々なタイプの人間と会った経験というのは対人関係にアドバンテージを与えてくれるかもしれないが、それ以上に河津には人の上に立つ自信が持てない理由があった。

その理由というのが、河津の中にある劣等感だ。

……文武両道で人望も厚いというのに何の劣等感があるんだって？  
考えても見たまえ。彼の実態を。

運動面ではどうだ。

全国大会、と聞けばすごいかも知れないが出場しただけだぞ？

一次予選を突破できなければ実質地方ブロックで一位か二位程度の實力しか証明できない訳だ。

各都道府県から多くて三名、大会に出場するとして最低でも四十人いるんだ。五十人も六十人もいる選手の中で一番下のレベルの奴らが将来も陸上を続けられると思うか？

ましてや三年生という嫌でも進路を意識する時期。陸上で食い扶持を稼ぐ見込みが無いとなれば陸上を諦めなくてはならない。

そして勉強面。

ここでも三年生という立場が彼に迷う暇を与えてくれない。

葉山高校は進学校。同級生は既に半数以上が志望大学を決めている。

河津も葉山高生とはいえ同じ学校の生徒と比べれば学力は見劣りする。

陸上競技に全てを捧げながらも必死に成績を維持し、それでも中の下、良くて平均程度。

以上の様な河津の現状を考慮すれば、その心の内は想像に難くない。

彼が子供の頃から心血を注いできた陸上競技では全国大会で目にする才能あふれる選手達に劣る。

中学の時点で陸上に不安を覚え、保険として第二の道に選んだ勉強は苦勞して入った進学校の同級生に劣る。

結果的に河津はどちらも中途半端になってしまったのさ。

もちろん河津が陸上を最優先して努力したことに疑いの余地は無い。

しかしこればかりは努力だけではどうにもならない問題。最終的に河津の陸上は頂点に届かず終わってしまった。

河津は今二種類の大きな劣等感に苛まれているということだ。

そんな河津の実状を理解できる生徒は葉山高校にはいない。というより想像さえしないだろう。

元々が河津は葉山高校に場違いな生徒なのだ。奴と同じ境遇の生徒はいない。

周りの生徒達は遠い世界の人間として、上辺だけの実績を見て勝手に判断してしまうのさ。あいつはすごい奴だと。

だから河津はそんな周りのイメージとかけ離れた自分に余計劣等感を強くする。

その苦しみは自分が人の上に立つべき人間だという自信を根こそぎ奪ってしまう。

部長に任命されてからの河津は、虚勢だけでそれを乗り切ってきた。

何とか理想の部長に、頼れる人間になろうと気を張っていたんだ。誰も理解してくれない中、一人で。

本当に可哀想な奴だった……

そして劣等感は、その裏返しの感情も河津に植え付けていた。それは、憧れ。

河津慎也は憧れていた　　全国で活躍する若き才能たちに、自分を取り囲む同窓の友たちに。

河津は他の多くの葉山高生とは違って、盲目的に大学進学を目指している訳ではなかった。



そもそも奴は陸上という勉強とは違う道を目指していた訳だし、それだけでも他の生徒とは違う視野を持っている。しかし河津はもう陸上の道を諦めかけていた。

それは葉山高校という環境のせいもある。

勉強という保険、悪く言えば逃げ道を残すために選んだ高校は、河津が真剣に陸上に打ち込むにはやはり相応しくない場所だった。設備も無い、指導できる人材もない。いくら身体能力勝負といえども河津一人では限界があつたのだ。

そのことを河津は他校の選手から学んだ。

自分が知らない知識を持っていて、それを教えてくれた教師がいて、その知識を実践する場もある。

全国大会に出るような他校の選手にはそれが当たり前で、でも河津にはそれらが一つも揃っていなかった。

それでも学校を変えられるなんてことはない。

一度飛び込んだ葉山高校という井戸は、入ったらもう抜け出せなかった。

たとえ外にどんな世界があるのかどれだけ知っても、その世界に行くことは叶わなかった。

そして井戸の中でも河津は劣っていた。

陸上とは違う、勉強の道で。

例え周りの生徒達が視野の狭い「井の中の蛙」であつたとしても、河津は彼らに劣っていた。

逆に外の世界を知っている河津は、力が足りないからやはり井戸から出られない。

どちらにせよ葉山高校という井戸の中でどちらかの道を選ばなく

てはいけない。

河津慎也は、こうした自分の境遇を自覚していて、だからこそ強く懂れる。

どちらかの力だけでももつとあったなら、きっと井戸の外にも出られただろうにと。

河津がこの後どうなったか、奴に救いと呼べるものが訪れたかどうかは、また別の機会に語るとしよう。

お疲れ様だ。ずいぶん長々と話してしまったが、聞いてくれてありがとう。

私も河津には結構思い入れがあつて、ついつい話が延びてしまった。

まあ今回の話は結局何だったのかというと、

「大海（大会）を知っている井の中の蛙（河津）」の話というところだ。

……正直に言つとこれが言いたくて冒頭で「井の中の蛙<sup>かわず</sup> 大海を知らず」という故事を紹介した。もちろん愚痴の内容も本当のことだが。

河津については後で触れる機会が必ずあるだろう。

少し歯切れが悪いかも知れないが今回はここまでにさせてもらつとしよう。

今回は……そうだな、男子ばかりが続いたからそろそろ女子生徒

の話もした方が良いかな。

そういう訳で次は女子の話だ。

だがくれぐれも勘違いしないでくれたまえよ？ 間違っても美少女なんて登場しないからな。

この物語で容姿が優れてると言えるなんてせいぜい私ぐらいのものだろう。

いやー残念だよ。この私の美貌を諸君に見せてやれないのが。所詮私はただの語り手だからな、私の美しさは諸君が勝手に想像するとしてくれ。

………嘘じゃない、嘘じゃないんだ。

そりゃ私も絶世の美女と自称するほど厚顔無恥ではないが、それでも良い女は自分に自信を持つものなんだ。

客観的に見ても若い頃は……いや今でも若いが、花の盛りの少女という頃の話で、その頃は男が寄って来ること一度や二度じゃなかったんだ。

今は職場が職場だから出会いも無いがそれでもあの頃の美貌を保っていると思ってる。

……うん、もういい。これでもまだ疑うなら好きに判断してくれ。とにかく、次回は女子生徒の話。そしていつも通り期待はするなということだ。

次回をお楽しみに！

## 四人目      清水鈴佳は属性持ち（前書き）

四人目の清水鈴佳さんです。初の女生徒ですよ！  
またしても残念な人間に思われてしまうかもしれませんが、彼女は  
前回の河津君ぐらいには重要人物ですので、どうかよろしくお願  
いします。

## 四人目 清水鈴佳は属性持ち

世の中には「属性」という言葉があるだろう？ 漫画やアニメ、ライトノベルが好きな者にとっては少し特別な意味を持つ言葉だ。例えばヒロインの性格を表す属性だけでも既にいくつかの属性が確立されている。「ツンデレ」はかなり有名な言葉になったし、他にも「ヤンデレ」「クーデレ」「素直クール」などは某少年が跳躍する週刊雑誌の生徒会漫画でも使われたことがある。

他にも体系化されているものでは「ロリータ」や「巨乳・貧乳」、「メガネ」「獣耳」「八重歯」「ツインテール」「ポニーテール」「ロールヘア」などの人物の身体的特徴、「ゴスロリ」「白衣」「コスプレ」「ニーソックス」「リボン」などの服装的特徴、また「教師」「メイド」「秘書」「委員長」「委員」「姉・妹」「シスター」「いとこ」「先輩・後輩」「幼馴染み」など役職や立場に準ずる特徴なども属性として（一部に）広く認知されている。……というかよくここまで色々と属性を作り出したな。

それはそうとこれらの属性は一人の人間の特徴を特出させる、あるいは法則化することで（一部の間で）誰にでも分かる属性として確立している訳だが、そのせいで現実の人間とは一線を隔てているのも事実だ。

言わばそれは二次元と三次元の線引きであり、二次元に傾倒する者が二次元を愛する理由であり、二次元に魅かれない者が二次元を嫌う所以である。

まあ現実味のある人間が好きなら三次元、現実になくても良いから理想だけを追求した人間が良いというなら二次元ということだ。

それでは始めよう。ごきげんよう諸君、鷹田英理子だ。

突然属性の話をしたのは他でもない、今回紹介する女生徒について説明するためだ。

私は人間なら誰でも多面性のある生き物だと思っているが、その多面性を「弱い属性の集合」だと論じる生徒がかつていた。その言葉を受けて考えてみると、確かにこれから話す女生徒は「弱い属性の集合」という言葉がぴったりかもしれないと思った訳だ。

彼女の名前は清水鈴佳<sup>しみずれいか</sup>。りんか、ではなく「れいか」だ。

葉山高校二年生、A型。

スリーサイズは知らん。私は保険医ではないし私の魔眼は女生徒の体の詳細を見抜くために備わっている物ではないからな。男女差別せず、プロフィールは名前と学年、血液型のみだ。

さてこの清水鈴佳という生徒、どうにもその人となりを言葉にするのが難しい。

定まった行動理念がある様には見えず、どこかつかみづらい生徒だった。

正義の名の下に悪を罰する優等生のようにも見えるし、自分の利益のためなら友でさえ見捨て犯罪も厭わない卑劣漢（女だが）のようにも見える。

普段生徒の一面しか見ることがない教師の私としては、あの出来事で清水が見せた常とは異なる一面に最初は驚かざるを得なかった。それを人間の多面性だと断じて、理解できないのは仕方ないと片付けていたのも今では恥ずかしい思い出だ。

で、まあその思い違いは別の生徒によって幸いにも正された訳だが、それを踏まえて見た清水鈴佳の人物像はなるほど属性と呼ぶには少々弱い要素の集まりだろう。

分かりやすく清水について説明しよう。

彼女は

「天才とは言えないが勉強のできる優等生で」

「人気者と言うほどではないにしろ彼女に好意的な生徒が多く」

「腹黒とは言わないまでも計算高く賢<sup>さか</sup>しい女で」

「守銭奴だと言い過ぎだが人より金銭に対する執着が強い」

「美人には届かないがそれなりに容姿の整った人間」である。

まあ言葉通りの人物だ。

地道に勉強して上位をキープしていたし、漫画みたいにファンクラブができたりはしないが清水を嫌う人間は滅多にいなかった。この辺りは清水の「良い一面」だと言える。

そして良い一面に対する「悪い一面」だが、清水は成績以上に頭が切れるという意味で「頭の良い」人間だ。賢いより賢しいという言葉が似合う、白よりも黒寄りの思考回路の持ち主だった。

清水はその出来の良い頭の使い道を主に二つに絞っていた。一つは言うまでも無く勉強、もう一つは金を稼ぐことだ。別に躍起になつて金をかき集めていた訳ではないし、アルバイトをしていた訳でもない。ただ清水の思考は大半が金銭に繋がっていて、高校までは下積みというのが彼女の認識だった。結果として彼女は今高給取りを目指して大学で勉学に励みつつ、その傍ら小金を稼ぐために鋭意活動中である。

清水の容姿については一つ面白い話がある。

彼女自身にはあまり関係の無い話だが、実は彼女は葉山高校の中でも有数の「顔の良い女子」だったのだ。

我が校には美人と呼べるような女生徒がないということは前回

も話したと思う。

ぶつちやけて言うとは勉強にかまけて美容を怠ってきた連中だから、受験から解放されて高校に進学した後もそこら辺がおざなりになるらしい。自慢できることではないが私はうちの女生徒と化粧の話で盛り上がったことが一度も無い。

それだけならまだいいんだが、不思議なことにちよっと同じ人間かどうか疑いたくなるような方々も入学してくるんだ。具体的なことを言うと失礼になるが、ちよっと顔のパーツがアレなことになっていたり、顔と身体の比率がおかしなことになっていたり、この作品が映像無しで本当に良かったと思ってしまうような方々だ。

まあそのような方々は今回もこれからも登場する予定は無いから安心してほしい。

そんな葉山高校の女子事情の中で、昔からある「病氣」の噂が密かに語り継がれている。主に男子生徒の間で冗談交じりに囁かれているその病氣は、別に本物の病氣という訳ではなく、ある症状が葉山高校の男子生徒にだけ一定の割合で発現することから風土病みたいだということで「葉山病」と呼ばれている。

まあくだらないことなのだが、なんでも葉山高校に在籍していると普段『あの女子達』しか目にする機会が無いから、偶に他校の女子を見るとものすごく可愛く見えるらしい。

とは言っても新入生が入学して間もない頃にそういう経験をすることが多いだけで、その後は次第に自校と他校のギャップに慣れていくそうで、葉山病は勝手に治る病氣らしい。

清水鈴佳はそんな悲惨な状況の中で比較的まともな顔立ちをしていて、しかも優等生ということもあって中々人気があった。といっても結局男子は勉強本位な生徒ばかりだし、ファンクラブ作ったりラブレターを渡したりするようなノリの良い連中でも無かった。なのでその人気を清水が自覚することはしばらく無かった訳だが。



この清水があゝの馬鹿とどう関わったかと言うと、「金を稼ぐ」と言う目的だけで馬鹿に協力し、「優等生」という立場を存分に利用し、まんまと大金とは言わないが協力した元を取れるだけの金を手にした。

その経験があつてかどうかは知らないが大学でも勉学以外のことで一稼ぎしてやろうと何かの活動をしているらしい。さっき言った「鋭意活動中」はこの活動のことだ。

……ここまで話してきたが、おそらく諸君は清水鈴佳が金に汚い人間と言うイメージぐらいしか浮かばなかったと思う。

それは仕方ない。仕方ないんだ。正直私が話した内容だと金云々の部分しか目立たなかっただろう。だがしかし、清水の金にうるさいという一面はあくまでほんの一面、しかも弱々しい一面なんだ。

普段の彼女はカネカネ言わないし、それこそ勉強のできる優等生で、わたしもそう思っていた。物語中では清水の金への強い思いが目立ってしまうかもしれないが、彼女が意地汚い守銭奴ではないことを忘れないで欲しい。

さてさて、一通り清水の紹介も終わったところで今まで通りつまらない過去話に行くと思つた諸君、甘い！ 甘いなあ！

『だが、その甘さ嫌いじゃあないぜ』

とか、某生徒会漫画の副会長の真似をしたくなるぐらい甘いなあ！

いつまでも変化の無いパターン化したものなど、お笑い芸人だろうと一話完結式漫画だろうと、者だろうと物だろうと、飽きられるに決まっている。

第一回の私の話はノーカウント、実質三回目となる今回こそテコ入れにはちょうど良いタイミングじゃないか。そこで私は、ある画期的な方法を導入しようと思う。

実は今回、ゲストをお呼びしているんだよ。

そのゲストと言うのが他にもない、清水鈴佳本人だ！

現在大学二年生、まだ話してもいない物語中から三年後のご本人が登場だ。

ふっふっふ……「葉山高校の日常」と銘打っておきながら高校卒業しちゃった奴が出てくるなんて、これは新しい！「画期的だ！新時代を築けるぞ、この作品は！」

「新時代築いてもすぐ滅びますよ、そんな時代」

おっと、清水。まだ呼んでもいないのに出てくるんじゃない。今は私が時代を切り開くかもしれない小説の新しい形態について独自の理論を組み立てようとだな、

「誰にも受け入れられないだろうから、早く諦めた方が良いでしょう」そんなことは言ってくれるな。新しいものとは何時の時代も受け入れられないものさ。今でこそ偉人と呼ばれる数々の先達は当初は民に理解されず、その大半が死後になってようやく功績を認められたものだ。私も生きている内に認められるなどと楽観的な思考は持ち合わせていない。

「いつか認められると思っている時点で楽観的です。あと、いい加減話しにくいので地文で喋らないでください」

『おっとそうか、それじゃここからは括弧つけて話そう』

「副会長の真似はもういいので普通に話して下さい」

「つれないなあ、清水。昔はもうちょっとノリが良かったんじゃないか？」

「鷹田先生には昔から冷たいですよ？」

「そ、そうか……」

諸君には改めて紹介しよう。目の前にいる彼女が清水だ。まあ見えないだろうが。

大学生になって少しは着飾ることを覚えたようで、薄く化粧もしている。葉山高校にいたおかげでちよつと堅い人間になったためか、流行に流され尽くした末の逆に無個性な女性達とは違い、自分のスタイルで個性を出している。

「なかなか良い女になったじゃないか、清水」

「はい、あと十年ぐらいしたら鷹田先生にも化粧を教わりたいですね」

「そう言ってくれるのは嬉しいがなぜ十年後なんだ？ ん？ 返答次第では殴るぞ」

「……その年でも美人に見える若作りの秘訣を教えてもらいたくて今は私自身若いですから」

ぴきつ。あれ、額の辺りから変な音が聞こえたな。ラップ音かな？

まあいいか。それよりも清水だ。

「今のは殴れという合図だよな？ 清水。よしじゃあいくぞ」

「具体的に今何歳の鷹田先生に教えてもらいたいかと言うと、さ……

……んんつもごつ」

「よし清水、三百円あげるからその続きを言わないでくれ。言わないでくださいお願いします」

「……色付けてくれたらサービスします」

「じゃあ五百円あげよう」

ちゃりーん。

ん？ またラップ音か。まるで私の手から清水の手に百円硬貨五

枚が落とされたようなラップ音だったな。

おつといけない、清水との話中だった。

「なんだかんだいって優秀で実年齢も若い鷹田先生なら十年後でもその美貌を保っているんだろうなと思って。その時は私も化粧のコツとかを教えて欲しいということですよ」

「そうかそうか。いやー清水は本当に良くできた奴だな」

諸君も見てくれたかな？

この純真で卒業した後も素直に教師を慕ってくれる可愛い元生徒を。

そういえば私が若いというのは嘘だと疑っている者がいた気がするが、今の清水の発言で思い直してくれただろう。これでけしからん疑いも消えるというものだ。

「確信に変わることで疑いは消えますね」

「うん？ 何か言ったか清水？」

「いえ、用事があるとのことでしたが今日は何のために呼ばれたのかとお聞きしました」

「ああそのことが」

私はまたてつきり、実は清水が腹の内では黒いことを考えていて、わざと私を怒らせた上に金をせびって、しかも私の年齢に関する疑惑を読者に悪い方向で確信させたのかと思ったよ。私の可愛い元教え子がそんなひどいことするわけないよな。

「ええそうですね」

「地文で話すなど言っておいてお前もあんまり地文に反応するんじゃないぞ？ 清水」

「すみません。気をつけます」

こほん、と咳払いして私は居住まいを正す。

ちなみに今日清水を呼び出したのは応接室。平田の時と同じ場所

だ。まあ今の清水は生徒ではないし指導ではなく本来の目的で使っている。

お茶を汲んで茶菓子も用意しているので、完全に雑談をする態勢だ。

「今日清水を呼んだのはちよつと近況を聞いておこうと思ってな」

「近況ですか？ それぐらい電話やメールでも良かったと思いますけど」

「風の噂で聞いたんだよ。清水が大学で何か面白い活動をしていると」

何度か出て来た、例の金目的で鋭意活動中らしい、その活動がなんなのか確かめようという訳だ。

「あのことを聞いたんですか」

「ああ。まあ教師としての親心みたいなものがあるんだが、それで清水がどんなことをしているか気になつてな」

「ふふつ。鷹田先生も心配症ですね」

清水が優しい笑みを浮かべる。いやそんな良い人そんな笑顔を見せても困るのだが。

なんせ清水は……

「清水は前科があるからな。心配にもなる」

「いやですよ先生。前科だなんて。私は誓って犯罪をしていません」

「犯罪ストレス……と言つかあれは犯罪だろう。ばれてないだけだ」  
そう、ばれてないだけ。

高校時代清水と結託したあの馬鹿と以下数名はマジ物の犯罪を起こした。

それがばれていないのは、ひとえに私が黙っていることが大きいだろう。

あの出来事の詳細を知っている中で警察に報告する必要がある立場にあるのは私だけ。

まあ教師として報告の義務はあっても義理は無い。某大魔王殺しの奇術師とは逆。

義理が無いのに加えて実は私ある奴に弱みを握られている。そのせいでもう心情的にはもう「面倒臭いし言わなくていいや」という状態だ。だからばれていない。

ああそうだ、諸君に今あの出来事の詳細を話すと作品が終わってしまうので省くがこれだけは言っておこう。馬鹿どもが起こした犯罪はそれほど深刻なものではない。

子供のいたずらの延長にある軽犯罪みたいなもので、隠蔽工作は巧妙だが手口と内容は単純なもの。人から深い恨みを買う様なものでもないし、適当に時効を待っていれば問題ない。そういう意味では心配無い。だが、

「私が心配しているのは大学に入ってもっと大それたことをしていないかだ。高校時代のあれは犯罪。もし似た様な事をさらに大々的にやろうというなら今度は隠し通せないぞ」

その私の言葉を聞いて清水はまたふふつ、と笑う。

「大丈夫です。犯罪じゃありません」

そう言って湯呑を手に取り、お茶を口に含んで一息。喉を潤してから再び話し出す。

「私が今大学でしているのは、学生向け教材製作のお手伝いです」「教材？」

……確か清水が行ったのは法学部が有名な大学。で、清水も法学部だったはず。

「はいそうです。うちの法学部を卒業した何代か前の先輩方が企業を立ち上げて、学内限定の教材を販売しているんですよ」

「ふむ……それで学生からアルバイトも募集しているのか」

雑用も必要だし、大学のためなら学生を安上がり雇えるかもしれない。

「いえ、アルバイトじゃありません」

「んん？ 違うのか」

「はい、そもそもちっちゃな会社なんでアルバイトの人を雇う余裕も無いんですよ。見切り発車で会社作っちゃったものだから経営が

回らなくて、学内向けの教材だけじゃ利益が出ないから急いで新事業を始めなきゃいけないんですよ」

……。ちよつと整理しよう。

まず清水は法学部の教材製作を手伝っている。まだ二年生でしかも勉強することの多い法学部。それでも教材を作る暇と知識があるというのは余程上手くやっているのだろう。

あとアルバイトじゃない。非公式に手伝っているのかもしれない……社員。

ついでに会社の経営が危うい。人手が足りない中、それでも使われている。

……。全然分らない。三年経っても清水はつかみづらい奴だ。

仕方なく清水に質問する。

「ええと、清水。アルバイトじゃないというのは正式には雇ってもらっていないということか？ それに経営が回っていないんじゃない？ 学生を雇っている余裕はないのでは？」

この清水に限って無償で手伝っているというケースは有り得ない。有り得るとしたら将来さらに大きく稼ぐために必要な行為という場合だけだ。

「ちゃんと社員として雇ってもらっていますよ。経営状態が悪くても使ってもらっているのは、私が優秀なことで、報酬制であることが理由です」

「社員って、清水はまだ学生だろう」

「働く量はそんなに多くないですけど、アルバイトより社員の方が肩書は上じゃないですか。就職活動でも有利に働きそうですよね？」

「う……む、そうか」  
まあ別に企業側が認めれば学生やりながら社員やっても問題無いのだろう。

「一応最低限の賃金は貰っていますがそれに加えて私の作った教材で出た利益から報酬をもらっています。それでも結構頼りにされて

ますよ」

「そうか、学生の内からそこまでやっているとなると、清水は将来大物になるな」

「もう、おだてても何も出ませんよ先生。それにお金が稼げるなら大物も良いですけど責任が付きまとわれない役職の方が良いですね。あくまで割に合う稼ぎじゃないと」

…… 実際清水はもう今の時点で大物の卵だ。

他の学生より何十歩もリードしている。清水ぐらいの学生は全国でも少数だろう。

なんせ、学生の内から企業に属し、自らの功績で報酬を受け取り、しかもそれが十分な稼ぎになっている。企業に自分を認めさせる手腕だけでなく、二年生の時点で学生向けの教材を作る知識を獲得するだけの能力もある。

なんだこれ、完璧超人か。出る作品間違えてないか。

「なんかもうそこまで行くと超人だな、清水は」

「言い過ぎですよ先生。偶々上手く行っただけです。偶然都合のいい企業が存在して、ちよつと高校時代の経験を活かして取り入れてもらっただけです」

高校時代の経験という言葉には少し引かかるが清水のことだし、警察沙汰になるようなことはしていないだろう。ばれないという意味で。

「勉強は大丈夫なのか？」

「教材作りも勉強ですよ。試験対策に特化した教材もありますし、成績も万全です。勉強と両立できるのも上手く行っている理由ですから」

「そうかそうか。そういうことなら安心だ。これからも頑張ると良い」

「はい、頑張ります」

そしてまた微笑む清水。



なんだか、大物になりそうではあるが同時にとんでもない悪女になりそうでもある。

今まで清水が見せた笑顔、あれはおそらく全て計算づくだろう。成長して心理を読みにくくなったが、時々瞳が黒い光を放っている。もちろん比喩的な意味だが、やはり賢しいという言葉が似合う女だ。

しかもひるむ私を見て喜んでるようにも見える。

何度もニツコリ笑ったのはあの出来事について話すなという牽制だろう。私が嘘の笑顔を見抜くのも計算の内、笑顔の裏にある牽制の意味を読み取らせている。

正直頭が良すぎて気持ち悪い。大学生になって悪い方向に成長している。

何よりこれだけ目を見張るような事を成し遂げているというのに、そのほとんどの行動が元は「金を稼ぐ」と言う目的から生まれていることが驚きだ。

そしてこれほどお金にがめつい印象が強くなっても、その実態は真っ当に努力してお金を稼いでいるだけなのだから二度驚きだ。

清水鈴佳という女生徒、否、清水鈴佳という女は少しだけその属性を強くしたようだ。

彼女は

「大企業は無理だろうが経営難の企業に自分を取り入れさせるぐらいには能力があり」「真っ黒には遠いが高校時代の教師を密かに脅すくらいには黒い計算を腹の内で行える」

「ミス大学に選ばれたりはいしないだろうが女に磨きを掛け美人と称しても差し支えない程度には美しく」

「守銭奴と呼ぶには意地汚さが足りないが将来間違いない大金を手にするだろうと思えるほどには金を稼ぐことに真剣な人間」  
に成長した。

優等生が優秀な人間に、それなりの容姿が美人に、黒い計算高さ  
がより黒い計算高さに、金銭への執着が金銭への真剣さに。

……これは酷い。社会に出たらもつと属性が強くなるんだろうか。  
楽しみでもあるがそれ以上に恐ろしい。こういう人間が本当にい  
るんだなという気持ちになる。清水の成長の過程を見られたのはあ  
る意味教師になったからこそできた経験だ。

まあ今日のところは普通に清水を見送ろう。大方話も終わったし。  
もし将来清水が道を踏み外しそうになったら、それを知った時は  
止めてやろう。

面倒臭いから常に目を光らせておくなんてことはしないが、教師  
としての義務と、顔見知りの義理でそれくらいはしてやりたいと思  
う。

清水ならば心配ないだろうがな。なんせ私の自慢の教え子だ。

清水には明るい未来が待っているさ。

よし、今回の話はここまでにしよう。良い言葉も言えたし。  
え？ それだけかって？

何を言っているんだ。諸君には最初から言っただけある通り、「葉山  
高校の日常」は特に何も起きずオチが無いことが、ほとんど特徴が  
無い中である意味唯一の特徴じゃないか。

ゆえに生徒の紹介をして、雑談だけで終わっても問題なし。次回  
の予告をしよう。

次回はどうしようか、そうだな……

「あの、話を締めようとしているところすみませんが」  
「ん？ どうした清水。終わらせたらちゃんと相手をするから待っ

て欲しいんだが」

「いえ、まだ話を終わらせてもらっては困ります」

「？　どういうことだ」

清水について語るべきことは今回はもう無いと思うのだが。

「実は今日、もう一人ここに呼んでるんですよ。鷹田先生から連絡を受けたことを彼に話したら、自分も久しぶりに先生に会いたいからぜひ同行させてくれと」

「それならなぜ一緒にいない。部屋の外にいるのか？　それとも遅刻か？」

どちらにせよあまり良い態度とは言えないな。

「部屋の外にいます。理由は、その方が先生が驚いて絶対面白いからって」

びくつ、と体が強張る。

私の記憶の中に、この清水と同世代で、「彼」と言うからには男で、私をからかって面白がりそうな、且つこの場で現れたら驚きそうな元生徒が一人いる。

清水も私を脅しながら楽しんでいた節があるから私をからかう人間に数えることはできるが、私が思い浮かべた元生徒は次元が違う。ぶっちゃけ私は奴が苦手だし、元生徒で無ければ体裁を気にせず「恐ろしい」と言ってしまうほどだ。

頼むから予想が外れていて欲しいと願う。

「それじゃ部屋の中に呼び入れたいんですけど、良いですか先生？」

「あ、ああ……呼んでくれ」

私がそう言うとき清水は扉の方に向かって声を掛けた。

「黒星くん。先生入ってきて良いって」

「っ……！」

予想が的中した。しかも次回になっていないのに新しい生徒の名前が出た。

別にこたわってたわけではないが、あの黒星という元生徒は色々な意味で型破りだったから、今でもそうであることを示しているみ

たいで嫌なんだ。

ここだけの話、私の弱みを握ってあの出来事の口封じをしているのは黒星だ。

だからこそ私は奴を恐ろしいとさえ思っている。

ドアノブが回され、ゆっくりと扉が開く。

「お許しも出た様なので失礼します」

一人の男子が応接室に足を踏み入れた。黒星だ。

まだ男と言うには未成熟な風貌だが、私の目にはまがましい才  
ーラが映っている。

こんなこと考えるのは奴が私の弱みを握っていて、その弱みが私  
にとつて人生を揺るがすほど大きな弱点であるからに他ならない。

実際の黒星に特に非道というべき点は見当たらないのだが、頭で  
は理解していても嫌なもの嫌で、感情は抑えられなかった。

「お久しぶりです、鷹田先生。相変わらず若く美しく、目を奪われ  
る美貌ですね」

「あ、う……うむ、褒め言葉として受け取っておこう。ありがとう」

もう嫌だ。一言交わしただけで話をする気がゼロになる。

「じゃあ私は先に帰りますね。先生はごゆっくり。黒星君と」

清水がにやにや笑いながら扉に向かう。

これは間違いなく故意だ。清水は私が嫌がるのを知っていて黒星  
を呼んだんだ。

ほら、いま扉を閉める寸前に思いつきり黒い笑みを浮かべた！  
次に会ったら絶対殴ってやる……

「どうかしましたか先生？ 具合が悪そうですけど？ 美しいお顔  
が歪んでいます」

目の前には黒星。部屋には黒星と私の二人きり。

とても耐えられる気がしない。ただでさえ清水の相手をした後なのに。

……こ、ここまででいいだろう。ほら、私面倒臭がりだし。もうあの手で行くしかない。伝家の宝刀を出すしかないんだ。

さあ行くぞ。じ……

「次回に続きます。僕の正体も明かされますので、乞うご期待！」

言われたー！

どれだけ型破りな奴なんだ。だから嫌なんだよ！

こうなったら意地でも締めだけは貰おう。

黒星の言う通り次回に続く。これは逃げる訳じゃないからな！

内容だと？　こうなったら次回は黒星の話をするしかないだろう。本当は奴の話なんてしたくなかったが仕方ないからすることにする。

そういう訳で次回は黒星という男子生徒についてだ。

それでは諸君、次回にまた会おう！

## 五人目 黒星研は究める（前書き）

かなり間の空いた更新になりますが、何とか形になったと思います。

五人目の黒星研君、かなり扱いづらくて苦戦しました。

私の中ではとても魅力的な人間なのですが、その魅力の何割を表現できたのか心配です。訳の分からないキャラクターになってなければいいのですが……

## 五人目 黒星研は究める

「葉山高校の生徒は三人に一人が変人だ」

こんな噂がまことしやかに囁かれるのは「勉強好きな奴は大概頭のネジが何本か外れている」という皮肉なのか、はたまた本当に奇人・変人が我が校には集まって来るのか。

その答えは簡単には出せないが、ただ一人の生徒については確かなことが言える。

黒星研という生徒だけは例外だ。

他の生徒と同じ枠にはめるべきではない。

普通の者とは違う変わったことをする変人であり、世にも稀な思考を持つ奇人であり、そして人とは思えないほどの卓越どころか超越した頭脳を持つ鬼人である。

詰まるところ、例え葉山高校が変人の集まる場所だったとしても、黒星だけは数の内に入れない方が良いということだ。あの鬼才はどこに居ても異質な存在であるに違いない。

というわけで「ごきげんよう、皆さん！」セリフを取るなあ  
ああ！

「自己紹介します。黒星研、現在は大学二年生です。当時のプロフィールで言うと葉山高校二年生、A B型です。どうぞよろしくお願います」

「始まりの挨拶を横取りした上にプロフィール紹介まで自分で済ま

せるとは。いやはや参った。私はお前をどう扱ったらいいんだろうね、黒星」

「とんだ御挨拶ってやつですね」

「質問を無視するな！ わざとだろ？ わざと私を困らせてるんだろ？」

「いいえ、僕は先生のご尊顔を拝見できるだけで幸せを感じられる人間です。ですから、当惑したお顔のほうが面白いからとかそんな理由で先生を困らせたりしません」

……心が折れそうだ。気味が悪くて一秒たりとも顔を合わせていたくない。

自分が私に苦手とされているのを知っているくせに、その上で私を立てるような言動ばかりするからますます気持ち悪い。

得体が知れない。何を考えているか分からない。だからより一層遠ざけたいくなる。

「はあ……」

「どうしましたか先生？ ご気分が優れないのですか？」

確かに気分は良くないさ。だが私はもう腹を括っている。

前回一度は覚悟を決めた。だから今更黒星から逃げるのも良くない。

どんな形にせよ今日はこいつと何かしらの決着をつけると決めているのだ。

「……黒星。これから話すことは真面目に聞け」

「分かりました。先生の仰るままに」

言葉は丁寧だがそれはいつも通りなので、本当に真剣になってい



るかは分らない。

それでもまあ、頭は不必要なぐらい良い奴だから少なくとも話せば理解はしてくれる。

話してもやっぱりだめならすっぱり縁を切ることも考えようか。

「まず、私はお前を嫌っている。それは知っているだろう」

「はい、自覚しています」

「だが教師としても、一人の人間としてもお前と今のままの関係でいるのは私の本意ではない」

「ご立派です」

「……だから私は、お前との不和の最大の原因を消すことにした」

途端に、黒星の空気が変わる。

今まで笑顔とも真顔とも言い難い微妙な表情だったのが、無表情に近い、私の心をそのまま映し出すような顔になる。

「その言葉は先生の本心でしょうか？」

黒星の問い掛けには正体不明の威圧感があつた。

私の返答次第で黒星の表情も変わるのだと気付く。私を試す様な、年の離れた青年だとはとても信じられない、人間の本质を見透かそうとする表情だ。

もう一度覚悟を決め、口を開く。

「紛れもなく私の本心だ。和解であれ決別であれ、今日この場でお前と何らかの決着をつけることを望んでいる。そのためなら脅迫も押し退ける」

つまり、私が黒星に弱みを握られているから脅迫関係が成り立ち、

そのため私は黒星を苦手だと思うのだから、弱みを弱みで無くしてしまえばこの問題は解決するはずなのだ。

黒星はゆつくりと目を閉じ、数瞬の後また目を開いた。

その表情は、おそらく真剣な表情。

黒星が私に初めて見せた本気の顔だと感じた。

「鷹田英理子さん。あなたの気持ちは受け取りました」

急にフルネームで呼ばれたが、不思議とむかつかないものだ。  
それだけ黒星が真剣ということなのだろう。

何かこれからすごいことを言われそうな、そんな予感がした。

「そして今この時を持って、私のあなたへの研究は完了しました」  
「……………は？」

予感がただけだった。

高校時代の黒星研は、入学当初から周りの生徒に奇異の視線を向けられていた。

まず注目を集めたのは、勉強ができること。

葉山高校では定期テストの結果で上位者の名前が張り出される。  
進学校らしく入学直後にも学力診断テストというものがあり、最

初ぐらいはと張り切っている新入生も多い中、黒星は堂々の一位を飾った。

他校に比べて少なからず勉強のできる生徒は注目される傾向にあり、学年一位ともあればなおさらだった。

だがそれだけでは終わらない。むしろここからだった。

学力診断テストはあくまで中学までの内容だったが、高校の授業が始まってからも黒星は学年一位を取り続けた。

何がすごいかって、一位を取り続けたことより、難問を苦も無く解答していたことだ。

葉山高校の試験はかなり難しい。

例えば数学なら平均点は高くても四十点、低い時は十点台まで下がる。

過去の記録を見ても最高得点者は七十点台が多く、平均点が高い時にやっと九十点台が出る程度だ。

それなのに黒星はそういう難問を何でもないのでにすらすら解いてしまう。

満点を取ることはあまりなかったのだが、必ずと言っていいほど簡単な問題を意図的に間違えていた。

後に聞いた話だが、本人は「知名度が高いと何かと役立つけれども、優秀な印象よりも異常な印象が勝ると逆に不便になってしまうから」と語っていた。

生徒から見た黒星は奴の狙い通り「例年の学力トップよりもさらに優秀な生徒」程度だったろうが、教師である私の視点ではテスト一つで自分の印象操作を画策する高校生という存在が不気味だった。しかしその反面、実際にそれを成し遂げたことやテストその物の出来の良さを見て黒星の中に唯一無二の才能を感じてもいた。

勉強面で優秀さを見せつける反面、黒星は奇行が目立った。

やたら人の内面に踏み込むような会話をしたり、時々突拍子もない行動を起こす。

文芸部に所属したかと思うと、部の活動には一切参加せず部室の一角で熱心にパソコンに向かっていた。

私はこれらの奇行が全て黒星の「研究」に関わる行為だと後になつて知った。

黒星研の研究についてなるべく簡潔に記しておこう。

以前、平田慶次という生徒の紹介をしたらどう？ 誰も覚えてないだろうが、奴には人間観察をする悪趣味な習慣があった。

言ってみれば黒星の研究はその延長にある。混じりっ気のない純粹な好奇心と知的欲求から行われる興味本位の研究である。文字通りただ「究める」<sup>きわ</sup>だけの行為であり、そこには何かしらの成果や利益を目的とする要素は一切含まれていない。

研究の方法は単純な物で、まず黒星が興味を持った人物がいたらその人物に当たりをつける。普段の言動を調べ、過去を調べ、時には弱みを握り、情報が足りなければ直接コンタクトを取る。

対象者は黒星の興味が無くなるまでありとあらゆる情報を調べ尽くされる。

黒星の研究は人間という種と、種を構成する個々の存在への興味で満たされている。

全体と個体の両面から人間と向き合う。

その欲求自体がどんな理由で生まれたのかは知らないが、天性のサドであることから他人の情報を丸裸にすることに快感を得ているのだと私は思っている。

何しろ私をからかう奴はとても生き生きしている。それはもう良

い笑顔を浮かべる。

だがしかし、そんな黒星の「研究」は世間に認められるようなものではない。

前述した通り十割が奴の興味に占められている上に、何の成果も利益もないため、研究と言っても仮に黒星が論文を書いたところで鼻で笑われるようなものだ。

強いて言うなら行動心理学という学問に近いが、黒星はまさに手段を問わないというか、もう何の研究分野だか分類できない内容になっている。それに被験者を募集して心理実験、という方法ではなく研究対象者の素の姿を捉えているので、本質的に違うものなのかもしれない。

私としては黒星がその人間のものとは思えない頭脳を駆使して情報を集める様子を見ているため、もし奴がその気になれば後世に残るような偉大な研究をいくつも成し遂げるだろうと確信している。

例えば黒星は群集心理にも長けていて、あの馬鹿との一件では我が校の気真面目な生徒達の心を見事に奴の意図した方向へ誘導して見せた。

黒星には奴独自の理論があるらしく、少し応用するだけでも莫大な利益を生めそうな効果を発揮していた。悪用すれば組織の一つや二つ楽に潰せるだろう。

「天才と馬鹿は紙一重」と言うなら、人の分を超える鬼才には「鬼才と変人は紙一重」とでも言う言葉がお似合いだ。

普通の人間ではありえないような思考回路だからこそ、常人と考え方も違えば、行動もおかしく見えてしまうのかもしれない。

だがまあ、私は黒星を嫌っているけれども、認めてもいる。

悪いと思う面は確かに多いが、あいつの能力は本物なのだ。  
おそらく大学でも好き勝手をしているだろうから、余計に勿体無いと思う。

話を戻そう。

異常な印象は避けていた黒星だが、限りなくそれに近い印象を抱かれることは良しとしていた。

考えてみれば当然のことだが、本当に異常と思われたくないなら適当に間違えつつ一位を取り、普通の優等生を演じていればいい。

そうしなかったのは黒星の「研究」のために理想的な立ち位置を手に入れたかったからだ。優秀であることは認められているが一方で変人だと思われ、何を考えているか分からないが、完全な恐怖の対象とはならない。

そういう立ち位置であれば、何をやらかしてもおかしくはないと思われる。

結果的に黒星が何かの行動を起こした時受け入れられやすい立場となったわけだ。

つまり黒星は研究を円滑にするために色々やっていた訳だが、驚いたことに一つの行為で常に複数の効果を狙っていた。

勉強面で優秀なら問題行動を起こしても教師の心証も悪くなり難いし、自分が注目的となることで色々な反応を見られるので研究の一環になる。自分を変人に見せるために奇行を重ねていたが、そもそもその奇行自体が研究行為であった。

まあ本質的に黒星が変人・奇人の類であることに変わりはないのだが、「変人だから奇行に及んだ」のではなく「自覚してより変人らしく見せるために奇行に及んだ」ことからその頭脳的一端が伺え

るだろう。

ちなみに「研究」があれば「実験」もあるだろうと思うかもしれないが、黒星にとってはただの日常会話でさえ自分の興味を満たすのに役立っているため、「実験」と他の行為を明確に区別することが難しい。今回はとりあえず一貫して「研究」「研究行為」と表現しておいたことを言及しておく。

そんな感じで黒星が「自分の研究」と言ったとすれば九分九厘この高校時代の「研究」と同じものを意味するのだろう。

だが、それはそれとして。  
いきなり「私への研究は終わった」と言われても訳が分からず呆けるしかなかった。

応接室のソファに腰掛けた状態で向き合ったまま、数分の時間が流れる。

一度過去に遡り、戻って来てもまだ思考が回復しない私に対して、黒星が先に声をかけてきた。

「先生？ 大丈夫ですか？ 僕の言葉、ちゃんと聞こえてました？」

黒星の口調は普段のものになっている。一人称も「私」から「僕」に戻った。

呼びかけられた私はゆっくり顔を動かし意識を黒星の方へ向けた。  
「……………ああ、おそらく、大丈夫だ。何を言われたか理解できなかったが」

それでも完全ではなく目上の者として体裁を取り繕うことも忘れていた。

「僕も少し意地悪が過ぎました。真剣にしていたつもりなのですが、つい驚かすことを優先しちゃって。すみませんでした」

珍しく黒星が殊勝に見える。普段の口調だけ丁寧で馬鹿にしているのをわざと分からせている様な喋り方ではなかった。

私が弱気になっているのに畳み掛けて来ないのは本人の言葉通り真剣だからだろう。

「謝らなくて良い。お前が本気なのは分かった。黒星、悪いが順を追って説明してくれ」

どうやらじっくり話せそうな雰囲気なので、黒星に自分で話すよう促してみた。

「ええ、もちろんです」

黒星は私の要求を快諾する。

「これから話すのは、種明かしと言つか解説と言つか、僕が何を考え先生と接していたか、またその裏で何をしていたか。そういう話です」

どうやら長い話になりそうだ。



「まず、先生は『僕が高校時代にやっていた研究』と聞いて何のことかは分かりますよね？」

「ああ、問題無い。あれを研究と呼んで良いのかは分からないが……大学でも同じことをしているのか？」

個人的には真面目に勉学に励んでいて欲しいが、それは無理な願いだと分かっている。

「そうですね、形は変わりましたが高校時代とそう変わりありません。少し面倒なのは教授達のご機嫌取りです。今は研究室を一つ奪……自由に使わせて頂いていて、ちゃんとした心理実験もやっています。こっちはこっちで面白いですね」

どうやら持ち前の優秀さで複数の教授に取り入り、弱みを握って一人の教授から研究室を奪い取ったらしい。その上で他の教授には猫を被ったままだということも伺える。

「で、その研究と私に何の関係が？」

「まあ平たく言いますと、その研究の対象に鷹田先生も入っていました」

「……………そうか」

また思考が止まりかけた。が、先程よりは分かりやすい。

何とか返事はしたが……つまり、ええと……

黒星と関わり始めてから四年ほど経つが、高校時代だけでも二年間。

私と黒星の関係は「黒星が私をからかう、脅迫する」という二つだけだと思っていたがそれが勘違いだとすると……その間の奴の言動の全てに違う意味が……

戸惑う私の思考は黒星の言葉に中断された。

「あまり難しく考えないでください。先生の僕に対する印象はそれはそれで間違っていないです。ただ『僕が先生の研究もしていた』という事実が加わるだけです」

……確かにそうだ。

黒星の研究内容は人間への興味に尽きるから、極端な話奴が興味さえ持てば誰でも研究の対象に成り得る。

つまりは、

「先生は『高校教師・脅迫されている・脅迫の内容が珍しい』と中々他にはいない人間だったので、僕は興味を抑えられなかったんです」

そついう訳か。

種明かしとは良く言ったものだ。種が分かってしまえば簡単、こいつの得体の知れない態度も私の色々な反応を見るためだったということだろう。

ここまでの話でずいぶん驚かされたが、黒星の次の言葉にもう一つ驚かされた。また、こちらの方が私にとっては余程重要な話だった。

「実は先生への脅迫はいつでも止めることができる状態です」

「なに！？　なら……いや、だが……」

一瞬喜びかけたが、すぐに疑問が浮かんた。

黒星が私を脅迫する理由は高校時代に犯した一件について口封じするためだ。

それなのに脅迫の必要が無くなるというのはどうということなのか。

「先生の秘密はその過去にあります。先生がこの高校の教師になった時に捨てた過去の経歴と自分の素性です」

「う……急にばらそうとするな。今までそれとなく引つ張って来たのに。驚くだろう」

「もういいじゃないですか。どうせ知ってしまえば大したことじゃありませんよ」

どうやら私の弱みの暴露が始まるらしい。

「なあ……私も確かに『ばらされてもいい』みたいなことを言ったが、やっぱり……」

「それじゃここからは僕がいつもの先生風に先生の紹介をします」

「ちょ、ちよつとまで！ それはさすがに恥ずか……」

一人目 鷹田英理子はお嬢様

「ああ！ もう始めてる！ しかもタイトルが恥ずかしい！」

「聞きたくないなら外出して来てください。小一時間で終わりますから」

「くそ！ 覚えてろよ！」

……さて、鷹田先生もいなくなつたところで始めましょうか。

ごきげんよう、皆さん。黒星研です。

今回お話しするのは他でもない、我らが鷹田英理子先生についてです。

いやー、待ちに待った話がついにつて感じですね。そうでもない？　そうかも知れません。

せっかくですから先生が作中の僕らと同じ高校生だった頃のお話をしましょう。

たかだえりこ  
鷹田英理子。

私立鷹上学園ようじょうの生徒で、A B型、花の女子高生という頃でした。

鷹上学園という名は皆さん初耳でしょう。

鷹田先生がわざわざ話すとは思えませんね。

この私立高校は葉山高校と同じく県内でも有数の進学校なのですが、明確な違いは葉山高校が県内第一位ならば鷹上学園は県内第二位ということです。

もちろんただの偏差値、数字上のお話ではありますが、この事実が良くない争いを引き起こしているんですね。

鷹上学園は進学校という特徴以外にも富裕層の子供達が入学することでも有名です。

私立らしく馬鹿高い授業料を取り、周りを金持ちの子供で固めて親にも子供にもエリート意識を植え付けつつ、金も巻き上げようという魂胆ですね。

このエリート意識というのが中々厄介で、（少なくとも当人達は）

立派な（つもり）家に生まれた長男長女が多い上に、容易ではない教育を受け続け激しい競争に生き残って来た人達ですから。金さえ払えば入れる生温い学園に入学するような金持ち連中より余程プライドが高いんです。

ただそれを言えば葉山高校と同じで、一般家庭の子供達から受験戦争を勝ち上がって来た人間ばかりですから条件は同じです。まあハングリー精神のおかげで葉山高校が一步リード、と言う感じです。そういう訳ですぐ近くに自分達よりも勉強のできる連中がいるからそれはもう目の敵にされるわけですよ。

ことあるごとに葉山高の生徒に突っかって来るんですが、葉山高の生徒はピンキリですから、底辺の生徒に威張り散らしてふんぞり返ってるなんて光景もしばしば見られます。

なんとなくの敵愾心しか持っていないのに、自分より成績が低い葉山高校の生徒を見つけると優越感を感じて勝ち誇っちゃうみたいです。

これが誰から見ても滑稽で、もちろん全員がこうという訳ではありませんが一部の鷹上の生徒がこんな態度を取り続けるものだから、葉山高の生徒から見た鷹上の生徒のイメージはただのかませ犬ですよ。笑っちゃいますよね。

まあそんな葉山高校と鷹上学園の確執は置いておくとして、鷹田先生の話をしなくてはなりませんね。

そうは言ってもそんなに話すことはないのですが、早い話が鷹田先生の父親が鷹上学園の理事長なんです。

『鷹田グループ』という企業グループがありまして、出版業とメディア関連に強いところなのですが、会長である鷹田<sup>たかだかずひと</sup>和仁氏が娘が生まれたからって半分道楽で学園を作っちゃったんですね。

さすが金持ちは僕達大衆にできないことを平然とやってのけてくれます。

また、この『鷹田グループ』という企業としての一面以上に『鷹田家』は名家として知られています。由緒正しい家柄、ということでしょうか。

現代日本では全く目立たないですが、力自体はある家です。表向きはただの企業として、実際は名家の誇りを忘れず裏では権力も振るうと。

僕達が知らないだけでよくある昔からの権力と人脈を地盤とした名家由来の企業ですね。

それで肝心の鷹田先生はと言うと、幼い頃から色々と教育されていました。

色々と言っても厳しい英才教育と言う訳ではありません。

「お淑やかな子に育ってほしい」と暴力的なテレビ番組を見たり外で激しく遊ぶことを制限されましたが、元々女の子ですから対して困りません。

「頭の良い子に育ってほしい」と名前を理知的なものにしたり足し算・引き算・漢字なんかを小学校入学前から習いましたが、普通の家庭でもやる子はいます。

「綺麗な子に育ってほしい」とおしゃれをさせたり絵画を見せたりして美意識を磨かれましたが、たくさん服を買ってもらって一緒に美術展にお出かけしたというだけです。

そんな風に案外ゆるい家庭で生まれ育った鷹田先生。

中学までずっと女子校で、これまたゆるい校風のところでしたから、信じられないことに高校在学時はおっとりふわふわしたお嬢様でした。

だってあの鷹田先生ですよ？

普段から男言葉で喋って愛読書は少年漫画とライトノベル。

一言目には「面倒臭い」、二言目には「後に回そう」が口癖の鷹田先生です。

それが中学生まで「ごきげんよう」とか同級生と挨拶交わしちゃって、高校に入っても天然系で可愛いと男子生徒に人気があったという……どうして今の有様だと思うでしょう？

ちなみに鷹田学園は普通に共学です。男女比は半々で若干女子が多いぐらいです。

そしてもう一つ余談ですが鷹田先生の言葉「私は美人」「昔はモテた」、これ実は本当の本当だったんですね。

周りから持て囃される様な美人でした。まあ逆に言えば身近な所以外では注目されない程度の美人ということで、別に飛び抜けた美人という訳でもないんですけど。

さて鷹田先生の変貌というかもはや突然変異と呼んでも過言ではない変化の原因ですが、これは鷹田先生が持つ自分の家への悪い感情のせいでした。

悪い感情とは何か？

この問いに答えるのは非常に難しい。

とにかくなぜか高田先生は自分の家を良く思っていなかったのです。

例えば十六歳の誕生日を迎えて突然見合い話が持ち込まれ、その見合い相手がストライクゾーンから大きく外れた大暴投も良い所の最悪な男だった。という明確な理由があるなら話は簡単なのですが、

フィクションじゃあるまいしそんなことは有り得ません。

僕が高校に在籍していた期間中では、鷹田先生が家を嫌う理由は解明できませんでした。

これから話すのはあくまで僕の推測です。

まず念頭に置きたいのが、いくつもの心理的要因が重なって彼女の感情を作り上げているのではという前提です。

心理学の初歩ですが、人間の感情は一つの要因ではなくいくつもの要因や経験が重なっていて、それこそ無意識のものも含んで様々な心理の積み重ねによって成り立つと言われています。

おそらく鷹田先生の場合もそれに当てはまるでしょう。

一般人には馴染みがありませんが彼女の家は地元の名家ですから、僕達には分からない苦労があつたはずです。

親戚筋や商売繋がり付き合いに子供の頃から関わっていたでしょうし、名家の娘に対するやかみの視線も日常的な物だったでしょう。

そういう意味では「家が原因の嫌な出来事」というのが普通の家庭の子供よりも多かったと考えられます。

さらに言えば自分の境遇を比較する対象がいたことも大きいでしょう。お嬢様学校やエリートが集まる学園と言っても先生の家のようなどころは一割にも満ちません。大抵が単なる富裕層で、家の事情に子供も関わらなくてはいけない程大きな家はそうそう無いのです。当たり前と言えば当たり前ですけどね。

大人達の間関係に付き合わされず、（勉強を除けば）特別苦労することなく、ただ豊かな家庭環境でぬくぬくと過ごしている子が周りに沢山いた訳です。しかもその子供達が自分に嫌味を吐いてくるとしたら、そんなことが幼い頃から繰り返されていたとしたら、



どうでしょう？

少しぐらいは女子高生の鷹田先生の心境も想像できるのではないでしょうが。

ただ一つ誤解しないで頂きたいことがあるですが、小さい頃の鷹田先生は自分の両親を嫌っていた訳ではなく、むしろ好いていました。親には責任がなく、彼女の家庭環境が仕方の無い物であることは幼いながらに理解していたのです。

しかしここからが残念と言うか、今の鷹田先生形成への第一歩と言いますか……高校に入学した頃から芽生え始めた自立心と、同時にやって来た反抗期が合わさって、混ざり合い、絡み合い、こじれにこじれた結果、何故か家と両親をひっくるめて憎むべき対象と認識してしまっただけです。

頭の良い人程うじうじ悩んだ挙げ句に突拍子もない考えを起こしてしまうという典型ですね。

ちなみにこのことは丁重にお願いして本人から聞いた事実をもとに推測しているので、信憑性は高いと思われます。

高校を出た後のことは割愛させて頂きたいのですが、簡潔に述べますと幾人かとの出会いを通して今の趣味に染まり、実家を継ぐ継がないで一騒動が起き、すったもんだの末に教師職に落ち着いて現在の鷹田英里子に至る、とそんな感じです。

これが鷹田先生の変化に関する僕の推測です。

いやー長々と話してしまいましたね。元々鷹田先生がお嬢様だという話でしたっけ？

大分脱線しましたが本当に絵に描いた様なお嬢様だったんですよ。

鷹上学園では高嶺の花なんて言われて、天然だから気付かない内に男子を振っていたり……

ああ！　　ぜひともその姿を見てみたかった！　　きつとさぞや面白……いえ、今とは違った魅力があったことでしょう。

それに、鷹田先生が今の性格に変化し始めるのはこの頃だと思っ  
んですよね。先程述べた自立心の芽生えと反抗期が重なった時期に、  
性格にも変化の兆候が現れていたはずなんです。

その変化の過程をリアルタイムで観察したかったというのも惜し  
む理由です。

いやあ、本当に残念だ……

おっと、また話が逸れました。

そろそろ先生を呼び戻しましょう。たぶん落ち着かなくてそこから  
辺りをうろろしているはずですよ。

「もう話は終わったのか、黒星」

「はい、おかげさまで皆さんに鷹田先生のことを良く知って頂けま  
した」

「ぐ、具体的にはどこまで話した？」

「話すのは面倒なので作者の原稿を読んでもください」

「ちょ……危ない発言をするな。……この紙か？」



「は？ え？ ……何だつて？」

「先生のご実家の弱みを握りました。それはもう鷹田グループなんていつでも潰せるぐらいのやつを」

「い、いや、ちょっと待て」

「だから先生に脅迫する必要も無くなりました。鷹田グループであれば高校生の軽犯罪について警察を黙らせるぐらいは造作もないことですから」

「それはよかった……って、だからちょっと待てと」

「僕はもう先生を脅迫する手段も理由もありません。それだけのことでです。他にも何か？」

「……………いや。そうだな、特に聞くこともない。これで決着だ」

「それでなんですが」

「ま、まだ何かあるのか？ 決着と言ったろう」

「いえ、決着については和解ということで同意します。その上でお願いしたいのです」

「なんだ。そういうことなら言ってみろ」

「先生は僕が高校で一番深く関わった教師ですし、これからも恩師として時々先生を訪ねてもいいでしょうか？」

「……中々教師には嬉しいことを言ってくれる。よし、分かった。

私も今までのことは水に流す。いつでも訪ねてくるといい」

「ありがとうございます。では早速なのですが」

「何だ。言ってみろ」

「ちょっと耳を貸してください。……………ごによごによ」

「む……………それは……………ふむ……………それなら……………良いだろう。好きにするといい」

「はい。いやー今から楽しみです。思えば葉山高校は興味深い人が

何人もいました」

「それだけお前の餌食になった奴らがいるんだな」

「まあ、少しは反省しています。色々な人がいましたからね。興味も尽きませんでした。平田君に河津先輩……清水さんは一見普通の人でも中身は違つかも知れないことを教えてくれました。他にもクイズ研の兄弟、日本史のあの先生、他校にも面白い方達がいまして……皆さん元気にしているでしょうか」

「私の知っている範囲ではどういつも元気でやってるよ」

「そうですか。それは良かった」

すっかり冷めた茶を飲み干して、カップをテーブルに置く。黒星も同じ様に茶を片付けていた。

二人同時に飲み終えたところで、自然と時計に目が向いた。

「ああ、もうこんな時間か。大学生とは言え、遅くまで校内に元生徒を残しておくのもよろしくないだろう。黒星、そろそろ帰るといい」

「分かりました。今日は有意義な時間を過ごさせていただいてありがとうございます。近い内にまた会いましょう」

「ああ、近い内にな」

「それでは失礼します。さようなら、鷹田先生」

「気を付けて帰れよ」

入室する時の様にはふざけず、黒星は素直に帰って行った。

……それにしても改めて今日一日を振り返ると、高校時代の黒星を思い返したこともあって奴の凄まじさが再認識されるな。

実家の弱みを握ったと聞かされて混乱したが、まあ奴ならあり得る話だろう。

………国との付き合いも深いんだけどな、私の家。そこから簡単に弱みになる情報を手に入れるって……いや、考えるのはよそう。実家の暗部なんて聞きたくないしな。

黒星研。変人にして奇人。そして鬼人。

記憶力、思考速度、視野の広さ、並行思考、先入観の排除などおよそ研究に必要な能力は全て高いレベルで保有している。

その能力はあらゆる分野において役立つだろうが、やはり真価を発揮するのは純粋な頭脳労働だろう。黒星はその力を自分の欲求のために、「研究」のために使っているのだ。

異質。能力も異質であれば、その行動、思考と心理、放つ言葉、全てが異質に思える。

実際は普通の人間かもしれない。異質を演じているのかもしれない。

しかし演技だとしてもあそこまで完璧な演技が可能ということさえ異質なのだ。

やはり黒星を表す言葉には、「異質」が相応しいと思う。

そしてその異常性は全て一つの目的、「究める」という行為に集約されている。

「究める」ための「異質」か、「異質」であるが故の「究める」なのか。どちらが先かは分からないがこの二つを持って黒星研だ。

その黒星がこれから……おっと。この先はまだ言えないのだった。

今日は私の個人的な諍いに巻き込んで済まなかった、諸君。  
もう一つ済まないついでだが、今回の次回予告は無しにする。

実際に読むまで分からないという訳だが、そう変わったことをするのではない。

私に言えるのはいつも通りに待っていてくれということだけだ。

それでは諸君。次回をお楽しみに。

## 六人目      瀬野和馬は馬鹿（前書き）

六人目の瀬野和馬君。馬鹿です。

第一話は彼で一区切りとなります。詳しくは後書きか活動報告で。



## 六人目 瀬野和馬は馬鹿

「あー、今回は何と言つか、あれだ、タイトルからも分かると思うが……」

「ついに瀬野君の話ですね」

「まあそういうことだ」

「ごきげんよう諸君。鷹田英理子と、」

「黒星研です。よろしくお願いします。」

「……………」

しばしの沈黙が応接室を行き交う。

私こと鷹田英理子の対面のソファには黒星研が座っている。

前回から少し間を置いて、二人でもう一度応接室に集まったのだ。いつもと勝手が違うので少しぎこちないと自分でも思う。

しかしそれは致し方の無いことなので、この第六回だけは諸君に目を瞑って欲しい。

黒星と目を合わせ、互いの表情に戸惑いが無いことを確認し、頷き合う。

「今回はいつもと若干形式を変更し、特別編としている」

「主な原因は筆者の技量不足です」

「余計なことは言わんでいい。まず始めに、なぜ今回語り手が私と黒星の二人なのかを説明しよう」

前回黒星に頼み事という形である提案をされた訳だが、この度語

り手の役目を黒星と交代することとなった。とは言っても勘違いしないで欲しい。黒星が語り手を代わるのはあくまでこの第一話だけであり、本編である第二話は変わらず私が語り手を務める予定だ。

正直な所第一話を何人分話してどこで第二話に移れば良いか全く考えていなかったので、黒星の提案は渡りに船だった。これから私が第二話の語りを始めても、黒星が順次物語中の人物について第一話で語ってくれるだろう。つまり同時進行だ。

第一話と第二話なのに同時進行というのはおかしい気がしないでもないが、そこは目を瞑って欲しい。

ただ同時進行に移行する前に一つだけやり残したことがあってな。それが今回の瀬野和直の話という訳だ。

もちろん瀬野和直とは私が散々「あの馬鹿」だとか「例の馬鹿」だとか言い続けていた馬鹿のことだ。一応主人公的な立場のこいつを語らずして本編である第二話は始まらないだろう。

こればかりは私が自分で話すと宣言していたから黒星だけに任せることはできない。

「そういう訳で第一話の節目ともなる瀬野和直の話は黒星と二人でこなし、同時に語り手の引き継ぎも行う運びとなった」

「説明お疲れ様です。どうぞ」

「ああ」

黒星からカップを受け取り、中の茶をグイッと飲み干す。

カップをテーブルに置き、話を続ける。

「さて、黒星。まずは瀬野のプロフィールを頼む」

「はい。瀬野和直君、<sup>せのかずま</sup>「かずなお」ではなく「かずま」ですね。物語中では葉山高校一年生、B型です。性格は自由奔放、周りを見ず、

自分の考えを押し通そうとする傾向があります。礼儀が無い訳ではありませんが他人を顧みることがほぼ皆無なため、知らず知らず周囲に迷惑を掛けています。成績は飛びぬけて悪く、葉山高校の入学試験ではたまたま引越して別の学校への入学などが重なり上位十名ほどが合格を辞退したため彼が補欠の補欠のずっと後の補欠として合格、試験の出来から見ても異例の低成績での入学となっています。現在は――

「ストップ！ ストップ！ プロフィールで全部語り尽くす気かお前は！」

「ああすみません。つい熱が入ってしまいました」

「そもそもこの第一話自体プロフィール紹介を無理矢理小説化した様な物なんだ、そんなことしたら薄い内容を無理矢理引き延ばしているのがばれてしまうだろう！」

「先生が今自ら暴露しましたよ」

「え？ あ、これは……ごほん、話が進まないからもうやめよう。」

黒星も次回から一人でやるのだから気を付けるように」

「……はい、分かりました。それで、次はどうしましょう？」

黒星の気遣いが痛い。

それはともかく何について話そうか？

現在の瀬野について話すと第二話の結末がある程度分かっているし、同じ理由で後日談はどれも不適切だろう。となると過去の瀬野だが、第二話からして瀬野の入学したところから始めるつもりだし……過去も現在も駄目ならここはやはり……

「……これからの瀬野について語り合おうじゃないか、黒星」

「馬鹿言わないでください。どうしてそこで未来に行ってしまうんですか」

馬鹿と言われてしまった。確かに自分でも馬鹿だと思う。

となるとやっぱり現在の瀬野か？ いやそれだとネタバレが怖い。

一体どうすれば……………

「先生、まだ選択肢があるでしょう？」

一体どうすれば……………

「先生？ 気づいているでしょう？」

一体どうすれば……………

「そうだ先生！ こいつのはどうでしょう」

一体どうすれば……………

「僕が瀬野君の過去について話すですよ。先生が知らないことでも僕なら知ってますから」

一体どうすれば……………

私がはじめを付けなければいけないのになあ………… 別の者には任せられないのになあ…………

「…………… 次回からの練習も兼ねて、ぜひとも僕に瀬野君について語らせて頂きたいのですが。どうかこの役目を僕に譲ってくださいませんか？」

「一体どうすれば…………… ん？ ああ、そこまで言うなら仕方ないな。黒星、お前に任せてやろう」

「ありがとうございます」

うん、まあ、黒星が頼み込むんだから仕方ないんだ。決して自分の役目を疎かにしたのではない。

面倒事が減って良かったなんて思っていない。

「それじゃあ黒星。早速瀬野の過去話とやらを聞かせてくれ。何について語るんだ？」

瀬野の過去というのもし少し気になるからな。面倒臭かった訳じゃない。

「瀬野君の中学時代についてです。色々逸話が残っていてむしろ本編より面白いですよ」

「滅多な事を言うんじゃない。メタな事も言うんじゃない」

「何を今更……」

瀬野の、あの馬鹿の中学時代か。確かあいつがいた中学は……

「瀬野君は成日市立成日中学校出身です」

「そうそう、県内でも特に馬鹿が多いと言われるあの中学だな」

とは言っても決して悪い意味で馬鹿が多いと言われている訳ではないのだが。

「その成日中学です。瀬野君は生まれも育ちも成日市なんですよ」  
「ふむ。それで？」

「そうですね……瀬野君の逸話は一つ二つ聞くだけでお腹一杯になる位に熱血だったり青春だったりするんですけど……」

そうぼやきながら黒星は記憶を掘り起こすために、虚空を見つめ

指を曲げ開くという思案の動作を繰り返す。

「入学式で校長のマイク奪って自己紹介した話と、一年生の時セクハラ教師に悪戯して辞職に追い込んだ話と、二年生の時夏休みの課題を二十八人に小分けして写させてもらった話と、三年生の時十二月に葉山高校に入ることを決めて勉強を始めてから合格するまでの話と、卒業式の時同級生の男子達に冗談で制服のボタン全部取られた話、どれを聞きたいですか？」

「……なあ、それは一つとして現実に取り得る事なのか……？」

「最初と最後はともかく、彼の所業の数々は彼一人で実現し得るものではなかったでしょう。ひとえに彼の周囲の人々が協力した、もしくは巻き込まれたからに他なりません」

「うん、まあ、そう言われれば高校時代にお前らが起こした厄介事よりはマシか」

犯罪は（たぶん）犯してない様だし、中学の時の方が行動力は低いのか？ 出来る事が少なかっただけで性格は全く変わっていないようだが……

「それで先生。どの話を聞きたいですか？ あ、体育祭で毎年大暴れした話が良いですか？」

「正直どれも聞きたくない。……だが敢えて選ぶなら一択だろう。三年生の時の話だな」

「やれやれ……せっかく昔の瀬野君の話なのに結局先生は勉強に結び付けたがるんですね」

どの口が言うか。

他は碌な物が無いし、そんな人間がどうして葉山高みたいな進学校を目指したのか気になるし、これは黒星も故意に選択肢を絞った

んだろう。」

「仕方ないですから、三年生の時の話をしあげましょう」

この言い回しからすると、さっきの私に対する仕返しも含まれていそうだが。

「さてその話をする前に基本的な瀬野君の人柄について説明しておきましょうか。先生は再確認ということでは」

「勝手にしてくれ」

「まあ先生は知っているでしょうが、瀬野君には人を惹きつける力というか、悪く言えば誰彼構わず巻き込む力がありますよね」

「ああ。瀬野を一応の主人公にするのもあいつが騒動の始まりだったのが理由だからな」

「そう。それは結果的に見ればそう見えるというだけで、瀬野君自身に本当にそんな力があるかどうかは分かりません。ですが、過去の瀬野君は偶々周りの興味を引くような人物で、彼の周りに集まった人々がさらに人を集めることで一連の出来事の規模がどんどん大きくなっていました」

「私が思うに、瀬野の性格が非常に特殊で個性的だから特定の人種が集まって来て、その特定の人種というのがこれまた人を集めてしまっ人種というだけじゃないのか？」

「そういう考え方も有りです。僕が言いたいのは、瀬野君の力を単なる不思議な魅力として結論付けるのではなく何かしら理屈を付けたいということですから」

変な所で研究者っぽいな、黒星は。

「話が逸れました。とにかく瀬野君の周りに人が集まっていたのは

中学時代も同じことで、彼を助けてくれる人間はたくさんいたんですよ」

「なるほど。察するに、瀬野の受験勉強もかなり周りに助けられたんだろ？」

「その通りです。具体的には比較的成績が良かったけど簡単に入れる地元の成日高校に進学を決めていたＴ君と、スポーツ推薦で受験が終わっていたＹ君と、自分も受験勉強で忙しいのに瀬野君を放っておけなかったＫさんの三人が中心になって瀬野君に勉強を教えていました」

「成日高校はたしか成日中学の生徒の五割が進学する偏差値５０位の普通の高校だったな。で？　で？　そのＫさんというのは瀬野とどんな関係だったんだ？　今も連絡とか取り合っているのか？」

「女の子が出てきたからって喰いつかないでくださいよ。良い歳して他人の恋路に構っている暇があるんですか」

「……………」

「……………私だって……………このまま行き遅れるのは嫌さ……………でも今はまだ仕事も楽しいし……………元教え子の言葉が辛い……………」

「はあ……………」

思わず指を組んで頭を抱え込んでしまう。

「あ、いや、本当に落ち込まないでくださいよ。いつもみたいに殴りかかる勢いで怒ってくださって良いんですよ？」

「どうせ私なんかとくに三十路越えしてるし……………言葉遣いも汚いし……………」

「男言葉でも受け入れてくれる人はいますよ。その内良い人が見つかりますって。ここは元気を出してください先生！」

「立ち直れそうにないから、しばらくそっとしてくれ」



えー、諸事情により鷹田先生は一時退場です。ここからは僕こと黒星研が一人でお送りします。

まずはT君、Y君、Kさんについてでしたよね！

三人ともプライバシーのため本名は出せませんが瀬野君との関係は軽くお話ししておきましょう。

実は三人とも瀬野君の幼馴染で、瀬野君の魅力がどうのとは関係なく仲が良い子達です。

T君は成日中学の中では割とまともな感性の持ち主で、瀬野君が何か悪巧みすればそれにさらに悪乗りして事態を悪化させる生徒が多い中、T君はストッパー役に回ることが多い子でした。それとなくフォローしてくれたり、瀬野君が困っている時の助けになったり、なまじ瀬野君のことをよく知っているだけにつつい助けてしまう子ですね。

Y君はノリの良い友達という感じで、瀬野君とくつついて悪巧みをする方の人間でした。瀬野君と一緒に色々やって小さい頃から体を動かすことが多かったため運動が得意だそうです。瀬野君の受験勉強を手伝う時は瀬野君が勉強だけに集中できるよう色々やってくれたみたいです。

Kさんは幼馴染み四人組の紅一点です。気になる恋愛関係については、瀬野君はあくまで幼馴染みだから放っておけないというだけでそう言った感情は無かったようです。彼女の瀬野君に対する認識は四人組のリーダーポジションというもので、瀬野君も特に彼女を意識していませんでした。

瀬野君は四人の中ではいつもみんなを引っ張る（引きずり回す）役で、ガキ大将がそのまま成長してしまったような一面があります。

Kさんは成日高校に進学を希望していましたがちよつと成績が危なかったので瀬野君の勉強を助けながら自分もT君に教わっていました。

T君は成績が良いと言っても葉山高校に合格できるほどではなく、自分には必要ない勉強なのにわざわざ苦勞して瀬野君に葉山高校の対策を施していました。

Y君は三人が勉強する横で雑事をこなすだけでしたが意外と面倒見が良い性格で三人とも勉強に集中することができました。

さあさあそんな瀬野君にとって心強い味方でもある三者三様の三人ですが、実際はどうだったかというところ、それはもう散々でした。

元々最下位に近い成績だった馬鹿もとい瀬野君を、しかも受験まで約三カ月の時期に実力より遥かにハードルの高い高校を受けると言い出した馬鹿もとい瀬野君をどうにかできるはずもなく。

瀬野君も筋金入りの馬鹿という訳ではなく確かに教えれば少しずつ成績は上がっていくのですが、如何せん元が元ですから間に合う訳がありません。

具体的に言うとな葉山高校の入試合格者の平均偏差値が毎年67前後で、最低偏差値はだいたい61です。偏差値40台から三ヶ月で最低60台にしないてはいけなかったもので、目標は偏差値20アップでした。

幸いにも葉山高校は公立ですから私立の様に専門の対策が必要ということは有りません。T君でも教えることは可能でした。

T君はこの際合格さえすればいいと方々手を尽くしました。過去問から出題率の高い問題を覚えさせたり、暗記科目を詰められるだ

け詰めたり、最後は運だと言わんばかりに記号問題をやらせたり。それでも最後の模試で偏差値56。合格判定はぎりぎりC。これはもう誰もが駄目だと思いました。

しかしそこは瀬野君。「大丈夫受かるって。何とかなる」と言つて葉山高校を受験しました。

私立の受験もせず公立対策に全力を注いでいたのでまさに一発勝負です。偏差値56と言えば成日中学の中ではかなり高く、成日高校はもちろん少し上の公立高校でも安全に狙えそうだったのに、やめろという周囲の声も聞かず瀬野君は葉山高校しか眼中にありません。

幼馴染みの三人はというと最初こそやめた方が良いと忠告しましたが当の瀬野君が気にしていないので、「それならいいだろう」「せっかく助けたんだし無駄にするなよ」「精々頑張りなさい」と彼を送り出しました。あっさり瀬野君の気持ちを認められたのはきつと四人の間で通じ合うものがあつたのでしょう。

そんな絶望的な状況の瀬野君でしたが受験結果はというと、先ほど述べた通り奇跡も奇跡。気まぐれな女神様が十回は行き来したとは思えない偶然が重なって瀬野君は見事合格しました。

まあぎりぎりアウトと言つてしまいたい程ぎりぎりの補欠合格だったことを本人は知らないので普通に浮かれていたのですが。

幼馴染み三人は驚いたり不思議がったり耳を疑ったり、それでも最後は周りの生徒も一緒になって盛大に祝いましたよ。成日中学では快挙と言つていい出来事ですからね。葉山高校に合格する生徒なんて十年に一人出るか出ないかですよ。

この時ばかりは瀬野君に三年間手こずらされてきた先生方でさえ、「問題児が最後にもやらかしてくれた」と皮肉を含ませつつも呆れ交じりながら喜んでくれました。

「そんな訳で瀬野君の中学三年間は大団円。ハッピーエンドの素晴らしい青春でした。高校時代よりこつちを物語にすれば良いですね」

「この作品を真っ向から否定するようなことを言うんじゃない。別に高校時代でも良いだろ。きっと中学時代に負けず劣らず面白いなる……はずだ」

「ああ先生。ようやく復活してくれましたか」

「ちゃんと話は聞いていたから大丈夫だ。黒星一人でやらせてすまなかったな」

おかげで樂ができ……げふんげふん。

「ここからはちゃんと仕事してくださいね」

「モノローグに反応するなど……しかしまだ話すことなんてあるのか？」

瀬野の話は一通り終わったと思うのだが。

「もう少しだけ話しておきたいですね。特に瀬野君が在籍していた成日中学のことはあまり話せていません」

「成日中学か。まだ馬鹿が多い学校としか紹介していないんだよな」

「ええ。それだけでは誤解を生むでしょう」

「まあそつだな」

葉山高校とはほぼ正反対な学校だから私も何かと興味のある学校だ。

「そこですが、鷹田先生は成日中学に対してどんな印象を持っていますか？」

「ん……そうだな。まずどの生徒も人生を楽しんでいるように見えるな。あの地域の特色というか、みんな難しいことを考えずに好き勝手生きている印象だ」

「そうですね。そういう人達の姿が『馬鹿』に見えるのでしょうか。馬鹿かもしれないが羨ましい生き方をしている、なんてよく言われますね」

「あと成績を見ても馬鹿だけだな。まああくまで成績だけの話だが」「生徒の平均偏差値は48ですね。義務教育機関としては若干問題有りそうな物ですが」

「いくら教師を変えても生徒を生むのはあの土地だからな。勉強が大事という意識が住民の間に無いのだろう。私も彼らが羨ましい」「転勤してみますか？ 鷹田先生は中学の教員免許も持ってますよね？」

「さも当然の様に言わないでくれ。お前が私の勤務先を決められることも個人情報を知っていることも今更驚かないがやはり気分は良くない」

「それは失礼しました」

そもそも成日に興味はあっても葉山高には愛着があるからな。そうそう離れる気はない。

「で、成日中学の話はまだするのか、黒星？」

「いえ、もういいでしょう。そろそろまとめたいと思います」

「別に毎回きっちりまとめる必要もないんだがな……」

「皆さん！ 面倒な人はここから下だけ読めば今回のお話が分かりますよ！」

「いきなりおかしなことをするな！ ここだけ読めとか元も子もないだろうが！ 今までの話は何だったんだ！！」

一度この型を破らないと気が済まないらしい元教え子をどうにかしなければいけないかも知れない。

「今回のお話のまとめです」

無視か。……もう好きにさせよう。

「成日市とは馬鹿と呼ばれながらも幸せな人間達が住む場所でした。その成日の土地で生まれ育った瀬野君は成日の人々の性格を凝縮しさらに濃くした人物と言っているかも知れません。無茶苦茶で考え無しですが本人は楽しんで生きている、瀬野君はそんな人間です。そんな瀬野君が今から三年前、葉山高校に入学しました。鷹田先生は葉山高校の生徒を無味乾燥な人間と例えたことがありましたが、瀬野君は味の強すぎる劇薬みたいなものでしょうか。取扱注意、混ぜると何が起きるか分からない。そんな存在ですね」

言い得て妙、なのだろうか？ 瀬野のことを少し大げさに言い過ぎな気もする。

「どうです皆さん。瀬野君のことが気になってきませんか？ 葉山高校に入学して瀬野君は一体何を起こしたんでしょうね？ きつとドキドキわくわくの面白い物語に違いありません。みんなで鷹田先生が語る第二話に期待しましょう！」

「ちよつ、そこで私に振るな！！ 散々ハードルを上げて渡すとか鬼畜にも程がある！」

好きにさせたらここぞとばかりに私を困らせに来てしまった。

「楽しみにしていますね」

「だからハードルを上げるな！」

思い切り叫んだので疲れて肩で息をする。

ん？ おい！ 今この話を読んでいる諸君！ 改めて忠告してお  
く。あまり期待をするな。

もし黒星の流言に騙されて期待してしまった者は申し訳ないが第  
一回でも読み返して頭を冷やしてくれ。

その第一回でも言ったことだがこの作品はあくまで現実のどこに  
でもありそうな話を語るだけのものだ。

諸君の近くで今もどこかで起こっていておかしくない出来事、そ  
れにちよつと偶然が重なって珍しさが増した程度だ。

いいか！ 期待し過ぎるなよ！ さもないと筆者も私も心労で吐  
血するぞ！

「ふう……」

「言いたいことは言い終わりましたか先生？」

「ああ。すこしすつきりした」

「それでは今回はこのくらいにしておきましょうか」

「そうだな。今から正式に引き継ぎも行うつしよう。ほら」

私は黒星に向かって右手を差し出す。

黒星はそれを見て一瞬考えながらもすぐに自分の右手を動かし、二人で握手する形になった。

「これから第一話の語り手をよろしく、終わり」

「また適当な……これも先生クオリティですか……」

そういう訳で次回からは第一話と第二話に分かれて進行することになる。諸君もそういうことでよろしく。

「ではまた次回。私とは新しく第二話で会おう」

「引き続き第一話は僕です。皆さんまた会いましょう」

「……あ。そうだ黒星」

「なんででしょうか？」

「結局瀬野はなんで葉山高校に入ろうと思ったんだ？」

「それも本編・第二話での楽しみです」

「私に丸投げするな！　なんでさっき話さなかったんだ」

「本編のネタバレが含まれますし、聞かれませんでしたから」



あそこで聞いておけば良かったのか……面倒事が増えた……

「今回楽しめた分、苦勞してください」

「でもわたしは瀬野が葉山高校に来た理由を知らないぞ」

「後で教えてあげますから……」

……

……

……

……

## 六人目      瀬野和馬は馬鹿（後書き）

本文中にある通り次から第二話も始めます。

ここまで読んでくださった方にこう言うのは何ですが、

「第二話」本編」「第一話」おまけ」という認識をお願いします。

## その1 小心者の前口上（前書き）

本編を始めるのに半年かかったことに自分でも驚きですが、それ以上にお気に入りが二件あったことに驚きました。

登録してくださった方ありがとうございます。

## その1 小心者の前口上

初めに自己紹介をしておこう。

私の名は鷹田英理子<sup>たかだえりこ</sup>。某県の県立葉山高校で教師をしている。

教師と言えば聖職者だと言われるが、私はそんな大それた人間ではない。

最近の教職に就く人間達はやたらと不祥事を取り沙汰され、聖なるイメージなど元々無かったかのようにすっかり汚されてしまったが、そんなこととは関係無しに私は自分をなんら聖性を持ち合わせないどころか真つ当な人間にも劣る小さな人間だと思っている。

大した取り柄もなく同僚の教師達の中ではまだまだ若輩者で、世界史の教員を務め生活指導の責任者を押しつけられている一介の教師に過ぎない存在だ。

その上生徒に対しては、偉そうな物言いを板になすり付けようと懲りずに遣い続け、失敗して揚げ足を取られても不遜な態度は取りやめようとしなない。その一方で私と違い優しく彼らに慕われる後輩教師を見下しつつも嫉妬している。聞いている通り人格が破綻しかけている底辺に近い人間だと自負している。

そんな本来なら諸君に語ることなど一つとして有ろうはずもない人種であるところの私ではあるが、あえて諸君に対して口を開くのはひとえに私のエゴ、私の勝手に過ぎない。

一番近い言葉で示すならば、独白。そう、おそらくこれは独白だろう。

語ってはいけないこと。もし何かの事実、秘密、あるいは事の真相、内情。諸君がそんな物を知っていたとして、それを人に喋りたくはないだろうか？

私は喋りたい。暴露してしまいたい。語り聞かせたい。強制されて口を噤んでいるのが我慢ならないし、私の秘め事を聞いた者の反応が見てみたい。

そんなことをすれば口封じをされている私はもちろんのこと、私の大事な者達、それほど大事でもない者達、全く知りもしない者達にまで被害が及ぶ。一連の出来事に関わったあらゆる者が不利益を被る。

強制されているからだけでなく、沈黙する必要もあるから語ってはいけないのだ。

……とは言え、重苦しく如何にも秘中の秘であるかの様な表現を遣ってみたものの、実際の事件はそれほど深刻ではない。私が諸君の気を引きたくてそんな言い回しをしたただけだ。  
だって、そうしないと誰も聞いてくれないだろう？

きつとこれから私が話すのは、どこにでも有る様な話だ。  
誰でも一生に一度か二度は耳にする、もしくは体験するであろう話。

しかしそれは話の内容がどこにでも有るということではなく、つまるところ結末がどこにでも有るということ。

私の話に触れて感じるものや得るもの。私の話の詰まる所、すなわち終結までを聞いて諸君に残るもの。

それらが私の話に由来するものである必要は全く無く、生きていればその内手に入るものであるということ。そういうことを予め理解して置いて欲しい。

だから私の話はさして珍しくもないし、諸君にとって有益である

とも言い難い。

あくまで私のエゴなのだ。だから聞くかどうかは諸君に決めて欲しい。

私がこの話を終えたとして、その時になって難癖を付けられたり後ろ指を指されたくないから今の内に諸君に断りを入れようとしている小心者であることも吐露しておこう。

あまり期待はしないで欲しい。私はただ私の知る事の内幕を話したいだけなのだから。

私が言いたいののはそれだけだ。まあ、それだけと言っても随分と好き勝手に喋ってしまったが。

まだその気があると言うのなら、引き続き私の話を聞いて欲しい。

## その1      小心者の前口上（後書き）

本作品にはパロディが含まれることがあります。完全に筆者の趣味です。

「その1」も某百%趣味で書かれた小説の語り口に影響を受けている面があります。

## その2 舞台の主役

私が語るのは、およそ三年前の話だ。

三年前の春に始まってから終わるまで一年にも満たない、人生全体から見ればほんの短い間の出来事。

もちろんその出来事に関わった者達の人生は私も含めまだまだ続いていく。

だから単純に終わりと言っているのかは分からない。終わってないと言っべきかもしれない。

結局物語に終わりの始まりも厳密に存在することは本来ならあり得ないことで、それが曲がりなりにも成り立つのは個々人の主観が共通したときだけである。

こうした考えは大抵の物語に付きまとう概念ではあるが、私は私の語る物語に区切りを付けるため、この出来事を一つの「事件」として捉えた。

諸君にもそれが物語の終始を決める目安だと認識しておいて欲しい。

事件。ある種の犯罪性を匂わせる語句ではあるが、そう間違っている訳でもない。決して間違いではないだろうが、日常に起きた事件なんてそんなもの珍しくないことも事実だ。

だから私は大して深い意味も込めずに、ただ便宜的に「事件」という言葉を使うことを宣言しておこう。

さて、物語の舞台は私が勤務する県立葉山高校。

葉山高校は公立の中では全国でも五指に入る進学校であり、近く



に金持ちが集まるエリート志向の私立高校もあるがそこを抜いて偏差値は県内第一位だ。

だからと言ってそれが自慢になるかと言うと、全くそんなことは無い。

進学率98%を超え、毎年国立・私立を問わず有名大学に合格者を多数出しているため、教師陣にとっては誇らしいことかもしれない。

しかしそれは当然ながら私個人の功績と言う訳ではなく、また教師の内の誰かが大きく貢献しているという訳でもない。私達教師はただ、長年葉山高校に蓄積されたノウハウによって半ばマニュアル化された教育方針に従い集められた、例えるならば大きな機械の歯車の一つに過ぎない。

授業計画も暗黙の了解として教師個人ではなく学校側が決めることになっており、授業で教師が自由に出来る部分など大して残っていない。その扱いはまるで会社に絶対の忠誠を誓わされるサラリーマンのようで、残業代の出ない雑務の多さを考えるとブラック企業と大して変わらない。

葉山高校の教師とは学校の教育方針を実現させるために適性のある者を選びだした結果の人選に過ぎないのだ。実際に使ってみて適性があるものは長く雇用し、適性の無いものは三年もせず他校に行く。それは我が校の教師の六割が十年以上勤務している者達であることからもうかがえる。

かくいう私もその内の一人だが、正直なところこの方針にはうんざりしている。付き合っていられない、他校の方がマシ、というほどではないが正しく現状を見れば決して良い扱いでないことは諸君も分かるだろう？ しかもほとんどの教師はこの葉山高校で教鞭を執っていることを誇りにしているため、そんな感情に1ミリも共感できない私は密かに孤独感を味わっている。

それでも、それでも、生徒との触れ合いがあれば、部活の思い出とか感動の卒業式だとか教師としての働きが報われる様なこともあれば、辛くとも何とか楽しくやっていけると思うかもしれない。

だがそれさえ無いのだ。この高校は本当にドラマに乏しい。

感動が無い。青春が無い。熱血が無い。劇的な出来事が無い。およそ学園ストーリーに出て来そうな面白おかしいことは欠片も起りようがない。

秩序が保たれているという意味では喜ばれるべきだが、悪い事も起こらない。ちょっとした騒動さえない。不良生徒も、不登校も、留年対象者も、停学も退学も起こった試しがない。

徹底的に無味乾燥、何も起こらない毎日、真に日常と呼ぶべき常の通りでしかない日常である。

様々な言葉を尽くしたが、一言で表せば葉山高校の日常は「つまらない」。

私がつまらないといったから何だと言う者は想像してみれば分かる。

高校に限らずとも諸君には何かしらの学校生活の記憶があるはずだから、そこから想像を膨らませて欲しい。

普段から学校生活が面白くないと思っている者はそこからもう一段か二段階つまらなくした学校生活をイメージすれば良い。

いつも学校に行くのが楽しみだと思っている者は頭に浮かぶ楽しみを一つ残らず取り除いた学校生活をイメージすれば良い。

それが葉山高校という舞台だ。

具体的に言えば友達付き合いが浅く、クラスの連帯感が薄く、熱心な部活動もなく、授業は基本的に受験を意識した内容、生徒全員の認識として「勉強ができる事が大きなステータス」である。

もちろん我が校の生徒達は機械的でガリ勉の根暗という訳ではなく、人間味のある諸君と何も変わらない人種ではあるが、これらの前提があるだけで途端に学校生活はつまらなくなるのだ。

もし諸君が我が校で生徒達と机を並べるようなことがあれば、彼らを少々冷めた人間と感じるだろう。諸々の事より勉強を優先するから、決してそれが全てではないとしながらもそれを一番に考える彼らは一般的な高校生と比べて違和感を伴い目に映るはずだ。

言うなればこの舞台の主役は勉強なのかもしれない。

しかしまあ、時によっては主役が変わることもあるだろう。視点を変えれば役者が変わることもあるだろう。

私が語ろうとしている物語は、まさにそのような時と視点の一致した物語である。

明確な主人公を決めるのはこれまた物語の終始を定めるのと同じく難しいことだが、あくまで私の視点で最も主人公らしい立ち位置であったのは、三年前の春に入学してきた一人の男子生徒だった。

その生徒の名前は瀬野和直。せのかずま

ある面から見れば馬鹿、別の面から見れば馬鹿、そしてその二つともまた違う面から見れば、馬鹿である。

つまるところもし瀬野和直という人間を表した物体が存在するとすれば、前後上下左右斜めどこから観察しても「馬鹿」の文字が見えるという不可思議な現象が起こるのである。

瀬野という人間の人格や言動を深く深く考察していけばまた異なる結果を得られるのかもしれないが、それでもやはり瀬野の第一印象や例の「事件」中の一連の行動は馬鹿っぽい、もしくは馬鹿そのものとしか言えないのである。

瀬野がどれほど馬鹿なのか、どんな馬鹿なのかというと、そうだな……

先ほど葉山高校の生徒の特徴の話をしたが、普通の人間に比べて冷めた印象を受けるとかそういったことは瀬野には起こらない。馬鹿だから。

奴が自分がいた中学と同じような感覚でクラスメイトに話しかけても余所余所しい態度を取られるがそれに気付かない。遊びに誘って断られるという事実は認識できるが、自分が周りはずれているということは理解できない。馬鹿だから頭が働かないのだ。

勉強面ではもっと分かりやすく馬鹿だ。何しろ入学試験の成績はぶつちぎりの最下位だから、知恵も知識もないということが分かるだろう。

しかし馬鹿だからこそ、葉山高校の生徒達とはかけ離れた存在だからこそ、葉山高校という舞台に変化が起きるのだ。

何もしなければ何も起こらない、諦めたら確率はゼロなどという言葉はそれこそ物語における常套句だが、この瀬野という馬鹿は偶然にも何かをする、諦める事がない存在だった。

馬鹿だから他人に避けられたとか話しかけるのをやめようとは考えない。そのため本人に現状を変えようという意図が無くとも結果として変化を起こしたのだ。

長い時間の中で偶然に起きた変化、それは延々と繰り返された実験で奇跡的に発生した化学変化にも似た物で、長年平坦な教師生活を送っていた私にとってはある種の感動さえ感じられた。

その瀬野を中心に起きた事件についての物語を、私は諸君に話そうと思う。

……………ここまで思うがままに語って来たが、よく考えてみれば私がどう思っているかなどは諸君にとつてどうでもいい話だったな。振り返ってみると物語を語ると言う目的に対して私は私情を混ぜ過ぎたと思う。

少しでも物語に集中してもらつたならば、語り手に私という個性は邪魔だろう。

これからはなるべく自分を抑えて語ることにしよう。

## その2 舞台の主役（後書き）

二話分使っても主人公出せませんでした……。  
「その3」は入学式の場面からです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7926v/>

---

葉山高校の日常

2012年1月12日19時11分発行